

清代銅・鉛鋅業の発展

里井彦七郎

目 次

- 一. ま え が き
- 二. 清朝国家権力と銅・鉛鋅業
 - 1. 清朝の強い志向
 - 2. 国家権力の鋅業収奪
- 三. 鋅業各層の私利追究と民営企業の発展
 - 1. 銅（鉛）民間市場の展開
 - 2. 「官利」に対する「私利」の対決
- 四. 国家権力の反動再編成とその意義
 - 1. 炉戸囲いこみと炉戸の斗い
 - 2. 小商品生産炉戸の没落一頭人企業の拡大と集中
- 五. む す び

一. ま え が き

19世紀中葉以後の東アジアにおける近代社会形成の歴史は、大まかにみて、三つの型をたどった。一つは、欧米近代社会に比べて、立ちおくれながら、曲りなりにも、資本主義を発展させ、植民地を領有する帝国主義への道を進んだ日本のタイプ。第二は、それと対照的に完全植民地社会への途を歩まねばならなかった印度、インドネシア、朝鮮など、アジアの大半を占める国々。そして、第三に、いわゆる半植民地半封建社会の方向を取った中国のタイプである。

その中国社会の近代化過程の捉え方において、吾国では戦前、戦中を通じて、いわゆる停滞論が支配的であった。即ち、一方で、中国社会内にお

ける近代的生産関係の発展過程を追究せず、同時に、資本主義列強への中国の従属の必然性とその深度を偏重するし方が支配的であった。

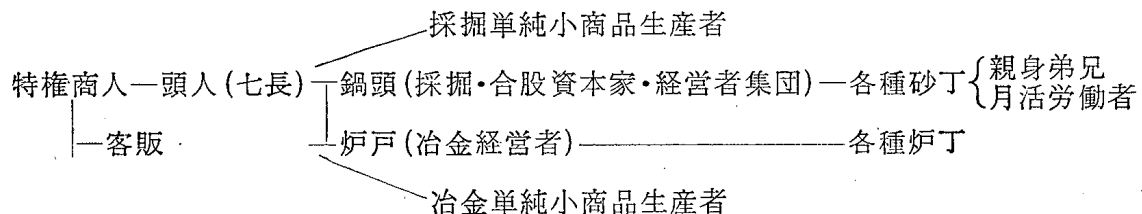
かゝる方法に対して、中国では早く抗日戦争中から、吾国では戦後、中国近代史学の各分野で深い反省が行われて来た。たとえば、アヘン戦争以後の民族解放運動、国内の階級斗争の歴史などを、正しく跡づけようとする多様な努力がなされて来たが、アヘン戦争以前に、封建社会の崩壊過程＝資本制的生産関係の萌芽が進行していたのではないかという問題をめぐって、中国で争われた(今も争われている)＜資本主義萌芽論争＞も、その最も重要な努力のあらわれである。そして明・清鉱業発展過程のとらえ方が、萌芽論を実証し、或いは全く逆にそれを否定する重要な一研究分野を構成していることは周知の通りである。明・清時代の鉱業、特に、銅・鉛鉱業は、棉糸・布業、生絲・絹織物業などの衣料生産部門と比べて、極めて特殊な産業部門ではあるが、その生産関係の発展史のとらえ方が、萌芽論争と関連した重要な課題の一つであると云わなければならない。

明・清鉱業史論争の内容のあらましと方法論上の問題点については、早く、田中正俊氏の労作＜中国歴史学界における「資本主義の萌芽」研究＞⁽¹⁾の中で紹介されているが、以下、本稿に必要な範囲で、問題点を整理してみると次のようになると思う。

萌芽論者の一人、白寿彝氏はこう主張する。明代中期(1435年頃)以後官営鉱業が衰え、民営が発展し始めた。特に明代末期(1556年頃)以後民営鉱業が支配的地位を占め、その民営企業において賃銀労働者があらわれ、広汎な小商品生産とならんで、マニファクチュア経営が発展しはじめる。次に、王明倫氏によれば一清代に入って、大商人が投資・経営する雲南銅鉱業において、明確にマニユ企業が発展したが、しかし、清朝国家権力の重圧によって、その資本主義的生産関係は萌芽的形態にとどまった。⁽²⁾これに対して、萌芽を否定する論者(たとえば黎澍氏)の如きは、清代雲南銅鉱業を官督商辦企業ととらえ、特にその「頭人組織」による鉱業労

働者の収取関係に注目、その把头制支配下における鋳業労働者は、近代的な「自由なる」賃銀労働者でないことを根拠に、近代的生産関係の展開を完全に否定するのである。⁽⁴⁾

云い換えれば、明・清銅鉛鋳業の官営から民営への発展過程と、その過程における労働形態が賃労働であったか農奴的労働であったかが、論争の中心だと考えていゝだろう。かゝる論争に対し、筆者は、中国の相対立する二陣営の論者がいずれも生産構造を明らかにしていない事に疑問を持ち、アヘン戦争以前の清代雲南・湖南両省の銅・鉛鋳業について、次表の如き生産関係を構造論的に明らかにした。⁽⁵⁾



その主旨の一つは—確かに、清代の銅鉛鋳業ではなお官營的性格を決してきれいには払拭していない。その証拠は特権商人和頭人達の存在と役割である。彼らは鋳税徴収人乃至銅鉛請負人及び鋳業労働者の管束者として、鋳業生産の深部にまで全構造的に浸透し、清朝国家権力の代理人的機能を果していた。中国の萌芽論者はこの明確な事実に向ておらず、その商品生産者の性格、マニユ的性格を無媒介に強調している。ところで、その特権商人、頭人達も、かゝる寄生的性格と同時に、もう一つの性格と機能、即ち鋳業資本家兼経営者乃至幹部的技术指導者集団としての性格、機能を本来的に内包していた。萌芽否定論者はこの点を究明せず、単純に、官督商辦企業というあいまいな把握のし方ですませている。清代銅・鉛鋳業の生産関係とその発展過程をとらえようとするとき、特権商人、頭人達のこの二面性を—一面性をでなくこの二面性をまさしく弁証法的に統一してとらえるべきではないか—これが先の拙稿の主旨の一つであった。たゞ、先の拙稿では、かゝる生産関係内部の矛盾の存在を全く構造論

的に指摘したにとゞまり、彼らが清朝国家権力との対決の過程で、その相反する二面性をどう統一したかは今後の問題として残しておいた。本稿の問題の一つは、その残された点を解明する所におかれる。

次に、先の拙稿のもう一つの主旨は、清代銅鉛鋅業が、複雑な特権商人制、頭人制におゝわれながらも、その基本的な生産要素は、採掘部門では「合股的投資・経営者集団」たる「鍋頭」であり（本稿では、湖南省の呼び名に従い砂戸人と称する）、冶金部門では冶金経営者たる「炉戸」であること、彼らはあくまで、鋅石を相互に売買し合う私の商品生産者であり、且つ彼らの間に広汎な単純小商品生産者とマニユ的経営者への分解がみられること、而もその分解が、比較的に落後的な「親身弟兄」労働から、近代的な「月活」賃労働への発展に対応したものであることなどを明らかにする事であった。たゞ、この点も亦、先の拙稿ではなお構造論的であり、特権商人から鋅業労働者に到る複雑で矛盾にみちた清代銅鉛鋅業生産関係に対する主要な搾取者は何であり、その収奪に対して各生産諸要素がいかなる斗争を行いつゝ、その生産関係を展開させ発展させたかを明らかにしなかった。この点を明らかにするのが本稿の第二の問題である。

第二の問題からはじめよう。この点に関する結論を先に記せば、当時の銅・鉛鋅業に対する主要な搾取者は清朝国家権力そのものであった。

では、どうしてそうなのか、亦どのような搾取者としてあらわれたのか。先ず、清朝国家権力と銅・鉛鋅業の関係を考えたい。

〔註〕

- ① 鈴木俊・西嶋定生両氏編「中国史の時代区分」所収
- ② 白寿彝氏「明代砷業的發展」—「北京師範大学学報」1956年第1期—。後に三聯書店1957年3月刊「中国資本主義萌芽問題討論集」下巻にも収められた。
- ③ 王明倫氏「鴉片戦年前之雲南銅鋅業中的資本主義萌芽」—「歴史研究」1956年第3期—
- ④ 黎澍氏「關於中国資本主義萌芽問題的考察」—「歴史研究」1956年第4期—
- ⑤ 拙稿「清代銅鉛鋅業の構造」—「東洋史研究」17の1。

二. 清朝国家権力と銅・銅鋅業

1. 清朝の強い志向

清代支配階級は銅・鉛鋅業に対して相反する二つの態度を示した。一つは、彼らにとっての基本的生産部門たる農業に対して銅鉛鋅業を末業と考え、しばしばこれを抑圧する事であった。鋅業が農業を直接的に破壊するものと考えたこと以外に、特に鋅業労働者の析出を、彼らの支配体制をゆるがすものとして恐れ、往々、警察力乃至武力を発動してまで私営鋅業を取りつぶした。而も、彼らは、同時に、銅鉛鋅業に深い関心、というよりは、はげしい熱意を示さざるを得なかった。何故だろうか。

宋代以来の、特に明代中期清代初期以降の商品・貨幣経済の発達⁽¹⁾は支配階級をして貨幣欲求者たらしめざるを得ない。彼ら自身の日常生活を維持するためにも、亦、龐大な官僚・軍隊機構を維持するためにも、秤量貨幣としての銀、及び制錢（法定貨幣としての銅錢）を最大限に獲保する事が、彼らの支配を安定させる必須条件であった。清代の支配階級がいかに銅錢をはげしく要求したか、一つの例を示そう。康熙から雍正にかけて行われた「黄銅の禁」がそれであった。この問題の歴史的経過については佐伯富氏の研究があるが、今簡単にその内容を要約すると、民間の黄銅（紅銅と白鉛の合金＝真鑄⁽²⁾）製品の製造と販売を厳禁し、亦、一定の規格品以外の民間銅器をすべて強制的に買い上げ、これを鑄つぶして銅錢原料とすることであった。時には、地丁錢糧の代りに黄銅器の納入を許してまで、黄銅確保に努力した。後述するように経済法則を無視したこの禁令は失敗するが、彼らがいかに銅錢をはげしく要求したかを物語ろう。そして、清代の銅錢材料は、時代により多少の差はあるが大体、銅、白鉛（亜鉛）、黒鉛、錫であったから、銅・鉛鋅業は錫及び銀鋅業とともに、政府権力のはげしい収奪にさらされる事も必然の勢であった。明代から清初にかけて、鑄錢材料としての銅は多く日本から購入された。しかし、雍熙末年以後、日本の銅

(いわゆる東洋銅)の生産が減少、日本からの入手が困難になった。⁽³⁾他方、銅銭の、清朝支配階級にとっての需要は、特に清初～乾隆にかけて極めて大きかった。⁽⁴⁾かくて、日本銅の入手困難化という外的契機と銅銭要求の増大という内的契機が結合して、彼らの銅・鉛鋳業への志向はすさまじいものとなる。

日本銅の出産減少を奏上した臣下、浙江巡撫黄叔琳に対して雍正帝はこう厳命している。「日本銅の出産がたとえどのように減少しようと、あらゆる方法を尽しく購辦せよ。銅銭鑄造材料は絶対に欠く事が許されないのだ」⁽⁵⁾と。一方で、末業として抑圧されつゝ、同時に、同じ銅鉛鋳業は清代支配階級の欠くべからざる重要生産部門となる。確かに、白寿彝氏その他の中国研究者が主張しているように、明代中期以後、銅鉛鋳業は官営から民営へと発展し、明末以降、清代に入って民営が中心になったが、而もそれは、清朝国家権力と無縁に発展したのではない。むしろ、それは清朝国家権力のはげしい志向と収奪の真ったゞ中に置かれる。先の拙稿で考察したように、清朝は自己の代理人として特権商人や頭人を生産機構の深部にまで送りこみ、労働者の管束、徴税と銅・鉛の買い入れなどに当らせようとしたのである。では、清代の中央・地方政権は、特権商人や頭人集団を通じて具体的にどのように収奪し、鋳業にいかなる作用を及ぼしかか。

〔註〕

- ① 「東洋史研究」11の1，拙稿「清代鋳業資本について」
- ② 佐伯富氏「清代雍正朝における通貨問題」—「東洋史研究」18の3。
- ③ 佐伯富氏「康熙雍正時代に於ける日清貿易」—「東洋史研究」16の4。
- ④ たとえば乾隆10年の上諭に「鼓鑄錢文，原以代白金而広運用。即如購買什物器用，其価値之多寡，原以為定準。初不在錢価之低昂。今惟以錢為適用。其応用銀者，皆以錢代。而趨利之徒，又復巧詐百出，使錢価低昂，以為得計。……不但商民情形如此，即官買辦公，亦有沿習時弊者。如直隸興修水利城工，坐糧廳採買布疋，所領帑金数万，皆欲易錢運往。其他官項，大率類此。」—「皇朝文獻通考」卷十六一
- ⑤ 「雍正硃批諭旨」浙江巡撫黄叔琳の項参照。

2. 国家権力の鋳業収奪

清朝の雲南銅・鉛鋳業との関わり合いは、主として、呉三桂討伐直後、即ち、康熙21 (1682) 年に始った。⁽¹⁾ 当時の雲貴総督蔡毓栄の奏請に基き、その積極的な開発が開始され、産額の2割を徴収したあと、8割の銅を廠民の自由販売に任せるのが原則であった。だが、康熙44 (1705) 年、貝和諾が総督のとき、国家権力による新しい収奪政策が決定された。即ち、廠民から生産物の2割を税銅として徴収する点ではそれ以前と変りはなかったが、残りの余銅の自由販売は一切許さず、官商⁽²⁾ (総商ともよばれた特権商人で、彼らは省城に官銅店を設立、省内余銅を一手に取り扱った) の手を通じて全部強制的に買い上げ、もし廠民が禁を犯して私売すれば、銅は没収し、その廠民は処罰するという原則が立てられたのである。そして、省政府が、廠民に「工本」(=生産資本) を前貸していた場合は、銅質に応じて、每百斤3, 4両乃至5, 6両で買い上げ、工本の前貸を受けなかった廠民には、礦区から省城の官銅店までの運搬費を自弁させた上、每百斤、5両で買い上げ、その何れにせよ、官商は每百斤9両2銭の価格で、中央政府の鑄銭局(戸部の宝泉局と工部の宝源局)に売りつけたのである。⁽³⁾ 官商の廠民からの買い上げ価格と、中央政府への売り渡し価格の差額は銅息乃至余息とよばれ、この「銅息」は上記の例に従えば、銅百斤につき、3~6両にも達していたことになる。つまり、官商は廠民取得価格の10割乃至5割に達する中間搾取を行っていたのであり、彼らはその高率の搾取分を督・撫・布政使の如き省の最高官僚達と分け合ったものと思われる。⁽⁴⁾

さて、康熙44年に打ち樹てられた雲南銅鋳業に対する国家権力の収奪原則は、ほゞ次の如き重要な問題をはらんでいる。第1に、国家権力と鋳業経営者の関係はあくまでも製品購買者と販売者の関係にあること、つまり、国家権力は私的経営者に対してその製品=銅の買い手としてあらわれるのである。而も、第2に、両者の売買関係は近代的な対等のそれではなくて、前者(国家権力)が、後者から銅製品を強制的に、そして、税銅以外

の凡ての銅製品を全部買い上げるという関係にあったのである。銅鋳業経営者は、政府の需要以外の販売市場から完全に遮断されようとしていたと云い換えてもよい。更に第3に全生産額の2割に達する重税が、私的経営者に課せられていたことであり、第4に、両者の買売関係において、極めて高い搾取率が働いていたということである。

而も、一層重要なことは、康熙44年の以上の規定は、単なる空文に終らず、可成りきびしく実行されていたということである。以下、その実情をさぐってみたい。

雍正4（1726）年、雲南巡撫鄂爾泰は路南州大竜井銅廠の年産（24万斤）からの「余息銀」を「每百斤、3両」と報告し、雍正帝から激賞されている。⁽⁵⁾ 每百斤、3～6両で買い上げられていた当時、大竜井銅廠のこの余息銀の取得は、先の規定にある高率の搾取がまさしく実行されていたことを示している。同じく雍正時代の雲南巡撫の一人楊名時は云う。雲南省当局の買上げ価格は每百斤、平均9両2銭の規定ではあるが、実際は4～6両の割でしか支払われていない。而も「課銅出其中、養廉・公費出其中、転運耗損出其中、捐輸金江修費出其中、即其所謂六兩者、実得五両一銭有奇…按之雲南本価、亦特十六七耳」と。⁽⁶⁾ 即ち、銅每百斤9両2銭という廠民からの公定買上価格は支払われず、課銅の外に、銅塊運搬途中の目盛り分と称する附加税、更には、河江の修理に対する寄附金や鋳場関係の役人に対する養廉、公費まで廠民から搾り取っていたのである。亦、同じく雍正時代、雲南巡撫をつとめた李紱も、官銅店（即ち総商制）こそ、雲南銅鋳業を害うものであることを痛論しつつ、その実情をこう伝えている。「政府から前貸を受ける廠民は、銅百斤に対して4両5銭の割で前貸を受けるが、実際は、税銅20斤の外秤頭から30斤取られる。（従って、銅100斤僅か3両で強制的に買い上げられることになる。）これが、資本力の乏しい廠民の苦しむ理由である。資本の前貸を受けない廠民は銅150斤を5両で買い取られ、（従って買上げ価格は每百斤3両3銭3分強）而も鋳区から省城の官銅店

までの運送費を支出しなければならず、更に、銅の代金の支払は極めて遅延し、何日も何日も待たされる。これが自備資本経営者を苦しめる原因だ。政府の強制買上げを嫌って私売すれば、私銅として没収され、処罰される」と。そして李紱はこう結論する。「廠民は油米や採掘費や冶銅費など莫大の資本が必要であり、官銅店への運送費も馬鹿にならない。而も買い上げ価格が極めて低いため、収入は支出を償えなくなり、彼らはいつも、もう礦石を掘り尽くしてしまったから買い上げは許していたゞきたいと政府に申し出ている。実はそうして、政府の収奪から逃れようとしているのだ」と。

乾隆のはじめ、御史包祚永も「政府の買上げ価格は、正銅の場合は毎百斤3両5錢から4両の割合であり、余銅の場合は5両から6両である。買い上げの公定価格が定められた頃は食糧も豊かで薪炭（生産用の燃料）も豊富であり亦、開礦のはじめは、礦石が得易く、採掘も容易であったので、毎百斤3、4両の価格でもなお廠民は苦しまなかったが、近頃は礦場に商民が湊集し、食糧や柴炭が騰貴し、一方古い礦山では礦石が減少、その上採掘費がかさむようになった。幸いにして、銅の産額が多いとどうにか僅かの利潤を上げて生活し得るが、産額が少いと、毎百斤4、5両の買い上げ価格では、労賃や柴炭費をまかなうのがやっとであり、時には、利潤どころか、元金まで喰いこんでしまう。督・撫が廠員（礦山監督官）に命じて廠民を招募し、資本の前貸をさせようとするが、廠員は廠民が破産・逃亡し前貸金がこげつきになるのを恐れて、前貸をしようとはしない。廠員が特に恐れるのは、廠民が前貸を受けても、政府支払代価が生産費にも足らず、その収入が支出に及ばず、結局政府への借金がたまって、課長（七長の一人）のはげしい追究を受けねばならぬことである……」と述べ、政府、廠民間の矛盾を痛論している。彼の眼を以てしても、低価格による強制的買上げでは、廠民の手に利潤が蓄積されないばかりか、元金も償えず、再生産の維持もむづかしいという現実が明らかになっていたのでは

る。ついで、乾隆19年、巡撫愛必達は、雲南省東川府会沢県の湯丹銅廠の生産状況を調査した結果、銅100斤を生産するには6両の資本を要し、当時の官価では廠民が8錢4分7厘2毫の欠損を来すことを認め、官価を、せめて採算のとれるだけ、即ち、8錢4分7厘2毫の値上げすべきことを上奏した。だが、そのとき許可になったのは、往の主張の $\frac{1}{2}$ 、4錢2分3厘6毫の値上げに過ぎなかった。⁽⁹⁾湯丹銅廠は、清朝最盛期を通じて、雲南第1、従って中国最大の銅山であり、その興廃は清朝の銅政と鑄錢事業の運命を左右する程のものであっただけに、低価格・強制買上げの実行によって、政府は莫大な利益を挙げた反面、廠民側は、乾隆19年早くも拡大再生産はおろか、縮少再生産の傾向を露呈せざるを得なかったことは、清朝の銅鉞業収奪政策がいかに大きな生産発展阻害要因となっていたかを物語っている。事実、その後、官価が多少値上げされ、亦乾隆38年には、一分通商⁽¹⁰⁾の制、即ち、全生産額の $\frac{1}{10}$ の自由販売を容認する制度も設けられたが、問題の本質を解決するものとはならなかった。⁽¹¹⁾現に乾隆末年、電南銅政の矛盾をすどく観察した王大岳が、些少の官価値上げや一分通商銅制では生産縮少の問題が解決されないことを述べたあと「硿路已深，近山林木已尽，夫工（労賃）炭価皆数倍於前，而又益以課長掊剝，地保之科派，官役之往来供億…於此廠民実受価六両四錢之多，尚須貼費一両八九錢而後足」と結論せざるを得なかったのである。⁽¹²⁾即ち、労賃・炭価がますます高騰するという悪条件下においては、様々な官吏の収奪と、低価買い上げ政策とによって、廠民は銅100斤を生産する毎に、1両8、9錢の赤字を産み出さねばならなかったのである。国家権力の収奪—それは、あくまで廠民から製品を買い取るという形をとりながら、実は全き前期的不等価交換であり、廠民の縮少再生産を産み出す一つの根源に外ならなかったのである。

中国の資本主義萌芽論者が、国家権力の収奪こそ資本主義萌芽の発展を阻むものと捉えていることは、確かに一面の真理を含んでいる。⁽¹³⁾だが、廠民に対する市場遮断、再生産の維持をさえ不可能にする低価・強制買上

げ、そして諸種の附加税を含む重税等々にのみ視点をおいて清代銅鉛鋅業の生産関係の発展を捉えるし方には賛成出来ない。何故なら、かゝる政府の収奪にのみ視点をおくなら、民営とは名のみであり、中央乃至地方政府の全き注文生産であり、決して商品生産とは云えないし、亦、かゝる縮少再生産を強制する国家権力が全面的に支配する条件の下では、近代的利潤が一たとえ萌芽的な形にしる産み出される筈がないからである。だが、清代の廠民は、まぎれもなく商品生産者であった。その点の生産構造については、先の拙稿（「東洋史研究」17の1）で詳細に述べたのでこゝでは再論しない。以下、二、三の史料について考えてみよう。

雍正8年、貴州省の砵山開発を主張しながら、総督鄂爾泰は「如商民獲利太微，則開採者稀少，遠近脚力太重，則販売者退縮……必使民間，於工本之外，尚有利息，而在官所收銅鉛，亦必有贏余，則上下均受其益⁽¹⁴⁾」と上奏しているように、不断に廠民からの収奪を心懸けた地方長官でさえ、「官利」一辺倒ではあり得ず、廠民の「工本外」の利息、即ち「私利」を考慮しなければならなかったのである。同じ鄂爾泰は、雍正4年、銅100斤の買上げ毎に3両の銅息があり、それが雲南の兵餉に持つ重大な意義を強調しながら、同時に「新開之廠，恐衰旺無定，俱不題報，只就附近老廠作為子廠，隱匿抽減，弊遂百出⁽¹⁵⁾……」と上奏している。即ち、廠民は、政府の収奪を座視していたのではなくて、どんどん新らしい鋳山を開発、官憲に登録せず、脱税と銅の私売とを敢行していたのである。鄂爾泰にとっては「弊（害）百出」ではあったが、廠民は私利追求の途を不断に講じていたのである。雲南銅廠に対する政府の収奪と廠民の私的生産の矛盾を痛論した王大岳も亦、官価の不当に安いことについて「然在當時莫有異辭，而今（乾隆末年）乃病其少者何也……是名為歸官而廠民之私以度利者猶且八九，官価之多寡，固不較也。自後講求益詳，綜核益密，向之隱盜者，至是而釐剔畢盡。於是廠民無復纖毫之贏溢，而官価之不足，始無所以取償，是其所以病也⁽¹⁶⁾……」と述べている。康熙40年代から乾隆末年までの雲南銅鋳

業は、名目は官廠ではあったが、実は業者が8, 9割の私利を収めており、その段階では官価の多寡の如きは問題にはならなかったというのである。本質的な事情は湖南でも同様であった。

乾隆時代湖南のある地方官は云う。「至煉銅炉戸，与煉鉛炉戸，雖名不同，計利則一……炉戸，砂夫驗砂定価，公平交易。煎煉銅斤，除抽課外，照例給価……利之所在不能強之以不煉，利之不在，亦不能迫之必煎……」⁽¹⁷⁾と。即ち採掘業者から礦石を買って生産する煉銅炉戸も煉鉛炉戸も，「利を計ること」（私利追求者であること）では共通であり，私利のあるところ，官権力を以てしてもその生産をやめさせる事は出来ないし，私利の無い所，生産を強制出来ないというのである。実際，彼ら銅・鉛炉ははげしく私利を追求した。湖南省桂陽州の白鉛炉戸を例示しよう。既に見たように，彼らは1日約1両5厘，月に約45両の資本を運転し，炉頭1人，小工2人と挑砂夫（採掘業者から購入した礦石を冶金場に運搬する人夫）を雇傭，年額1万8,000斤の白鉛を生産する事によって年間50両前後の純益をあげていた小企業家であったが，彼らには浄白鉛生産過程で，鑄錢材料にはなり得ない不純鉛，即ち「白鉛渣」があり，それを余鉛とともに「客販」⁽¹⁸⁾

（白鉛流通商人）に自由販売することを許されていた。鉛渣は制錢の材料にはならないが，「粗本器具」の原料として可成りの市場価値があり，100斤1両2錢で売られていた。しかるに，乾隆22年，湖南省城の鑄錢局（宝南局）で制錢を増鑄する事になったため，彼らの余鉛は勿論，鉛渣の自由販売まで禁止されてしまった。だが，約5年間，省政府の禁令を守って徒らに鉛渣を累積放置していた彼らは，同27年，州城に「齊赴」して，知州その他の関係官僚に禁令解除を訴え出た。炉戸達の切実な言葉を聞こう。

「此税余之渣，皆蟻等血本所係。積本日多，微本日細」^{てまゑども}「若不亟請流通，資本日擱，勢有難支」⁽¹⁹⁾「籲懇查驗積渣，曉諭客販収買，俾微本流通……」——。鉛渣が自分達の「血本」であり，その自由販売を禁止されては生産が崩壊する外ないという炉戸達のこの切実な訴えに，廠務関係の地方官

も同意せざるを得なかった。彼らも「白鉛渣は黒鉛渣と異り復煉に堪えず」,「無理矢理に煉せしむれば歇業せしめることになる」と主張,「炉戸等資本無幾,渣壅則本擱,未免生計維艱,事関廠務」と述べて,自由販売許可の至当なることを上官に訴えたのである。だが巡撫の判決は炉戸達にとって冷酷であった。一鉛渣の私売を許すことはどの「章程」にもない。お前達(地方官)まで,炉戸の云い分に加担するのは,炉戸達と結托して私腹を肥しているに違いない。鉛渣の私販を許す事は,淨鉛の透漏(非合法の自由販売)を認めることになる——かくて,炉戸達の切実な願いは拒否され,逆に,鉛渣に関する詳報と,「嚴加查禁」とを命ぜられたのである。因みに,乾隆26年度1年の,桂陽州全体の白鉛渣総生産額は三千一・⁽²⁰⁾二百斤,これを全部客販に100斤1両2錢で売っても,高々年間37両余,炉戸一人当りの取り分はせいぜい1~2両に過ぎない。だが,この少額の而も鉛渣の自由販売をめぐる,省当局がかくも冷厳に処置し,炉戸も亦,州城に「齊赴」(デモンストレーション)してまで運動した所に問題の深さがある。云うまでもなく省当局にとっては炉戸1人年間1,2両分の自由販売を許すか否かが問題ではなく,その販売ルートを通じて,淨鉛が闇売りされる事をこそ恐れたのであり,他方炉戸達にとっては,「官利」即ち,鑄錢のための市場遮断と低価強制買上げこそ,彼らの本質—商品生産者としての性格を根本的に破壊せんとするものであった故に,はげしく争ったのであった。乾隆27年以後,この白鉛渣をめぐる両者の衝突がどう展開したか,残念ながら,伺う史料を持たない。しかし,僅か少額の白鉛渣をめぐるこの一連の諸事實は,「官利」に対する「私利」の斗いが,いかに激しいものであったかの一端を吾々に伝えるであろう。そして,清代銅鉛鋅業において,単純商品生産から(たとえ萌芽的形態にしろ)資本制的生産関係への転換,発展を問題にする限り,この銅・鉛廠民による私利追求,官利との対決の歴史的過程を無視するわけにはいかない。以下,白・黒鉛と違って,原則として余銅の凡てを買い上げられることになっていた

銅廠民のこの問題を中心に考えてみたい。

〔註〕

- ① 嚴中平氏「清代雲南銅政考」
- ② この官商・総商については先の拙稿（「東洋史研究」17の1）参照。
- ③ 阮元「雲南通志稿」卷七六，食貨八之四，京銅。及び「皇朝文献通考」卷一四，錢幣二，康熙四十四年の条。
- ④ 「雍正硃批諭旨」貴州威寧總兵官石禮哈，雍正3年4月22日の条。
- ⑤ 「雍正硃批諭旨」雲南巡撫管雲貴總督事鄂爾泰，雍正4年4月9日の条。
- ⑥ 王大岳「銅政議」—「皇朝經世文篇」卷52。
- ⑦ 李紱「与雲南李參政談銅務書」—「皇朝經世文篇」卷52。
- ⑧ 嚴中平氏前掲書より引用。
- ⑨ 王大岳の前掲文章参照。
- ⑩ 同上。
- ⑪ 同上及び嚴中平氏前掲書参照。
- ⑫ 王大岳前掲文章。
- ⑬ まえがきに挙げた諸論文の外，尚鉞氏「中国資本主義關係發生及演變的初步研究」109頁など。
- ⑭ 「雍正硃批諭旨」雲貴広面總督鄂爾泰，雍正8年1月13日の条。
- ⑮ 「雍正硃批諭旨」雲南巡撫管雲貴總督事鄂爾泰，雍正4年4月9日の条。
- ⑯ 王大岳前掲文章。
- ⑰ 「湖南省例成案」（以下「成案」と略称する）卷12「辦理磁廠各条規」
- ⑱ 前掲東洋史研究11の1，及び17の1の拙稿。
- ⑲，⑳ 「成案」卷16「桂陽州廠白鉛渣一項照旧禁止出售行令廠員嚴加稽查如有私壳及夾帶偷漏立即分別究治」及び「桂州銅鉛各磁情形開銷細数各条」

三．鉱業各層の私利追究と民営企業の発展

1. 銅（鉛）民間市場の展開

廠民が，重税から脱し，政府権力との不等価交換関係を絶って，商品生産者としての私利を実現するには，当然銅・鉛国内市場と結合しなければならない。この問題の本質をさぐるために，先に少しふれた「黄銅の禁」について考えてみよう。康熙時代から始まり，雍正に入って特にきびしく励行されたこの禁令の目標はたゞ一つ，即ち，政府が制錢材料（黄銅）を

その手に確保することであったが、その内容は二つに大別出来る。一つは、軍器、樂器、天平、法馬、等子、骨董品、海洋の月晷、儀器、鎖鑰、箱櫃、鞦轡、刀束、刀環、刀箍などは例外として使用を許す外、他の一切の黄銅製品の使用を禁止し、銅質によって公定価格を定めて（熟銅は毎斤1錢1分9厘9毫2絲，生銅は毎斤9分5厘9毫4絲4忽）官が収買，各省で開局鼓鑄することである。他の一つは、黄銅器皿の製造と販売を禁止することであった。階級的には一品官員の家、地域的には紅銅・倭鉛の豊かな雲・貴両省が夫々勵行の外におかれたが、この禁令に対する中央政府の熱意ははげしいものがあり、地方官も「地方緊要公務」⁽¹⁾として可成り熱心に収銅につとめた。黄銅器を錢糧に抵算することを許したり⁽²⁾，銅器を多量に取引する當舖（質屋）への監視をきびしくしたり⁽³⁾，或いは、銅鋪から「決して黄銅器を売買しない」という誓約書を取りつけたり⁽⁴⁾，保甲制を通じて収買したりした⁽⁵⁾。かくて、この禁令は多少の効果を収めたようである。たとえば、蘇州の如きは、雍正5年から10年までの5年間に、生銅5万9千400余斤，熟銅87万100余斤を収買し，その間15万1900余串の制錢を鑄造した。だが、河南總督田文鏡が正しく指摘した通り，「小民の銅器には限りがあり」，禁令品の大半は官紳富戸の手にあつて，容易に収銅に応じないという矛盾があつた。小民にしても禁令が「嚴急に過ぎ」⁽⁶⁾て，家毎に搜索され，強制的に収買されれば，紛擾をかもすこと，この禁令に最も熱心であつた雍正帝自身の認める所であつた。否，彼が「朕前諭省府禁用銅器，亦不過姑試行之，恐遽行苛禁致滋擾，俟行之有効，漸次應之意耳」と兩広總督孔毓珣に硃批しているように，黄銅器の使用禁止，強制買上などとうてい行われ得ないことは，雍正帝自身がよく知っていたのである。事実，蘇州が例外であつた外，全国的にみて，収買の効果も廖々たるものであり，雍正6年，東安県知事となつた李玉章は，禁銅の令しきりに下つたが，「不能実行，虚張文簿應之」という県下の実状を目撃し，「愀然」として「是相率為偽也！」と嘆じている。勿論，この禁令が全然実行されなかつたのでは⁽⁷⁾

ない。むしろ、官紳富戸がその被害を免れる一方、小民達はきびしい「胥吏の需索」を免れず、折角銅器を納入しても、代価の半を中包され、或いは全然代価を貰えぬという事態が各処に展開された。それにしても、「紛擾」⁽¹²⁾を来して実行し難く、亦官にとっても成果の少ないことを知りながら、雍正帝が敢えてこの禁令を公布し、施行を厳命した所に問題がある。

先ず、無理と知りつゝ強行した所にこそ、清代支配階級の制錢への強い欲求が示されている事は明らかである。次に、彼らの本意は別の所にあった。雍正帝自身の臣下への一連の硃批に聞こう。⁽¹³⁾「黄銅之禁，原恐銷燬制錢之故」（雍正5年3月17日蘇州巡撫陳時夏への硃批），「總之除曷止販賣銅器，杜絕銷燬制錢，察緝私鑄外，其余要在因地制宜，相機時措」（雍正6年2月3日田文鏡への硃批）「禁銅原為銷燬制錢起見」（雍正6年8月4日孔毓珣への硃批）「朕屢降諭旨，禁用黄銅器皿者，蓋欲杜燬錢製器之弊」（雍正6年2月3日田文鏡への硃批）——いな，一層明瞭にこう硃批される。「第一嚴禁燬錢私鑄為要，收銅猶為次之」と。（雍正6年正月常賚への硃批）。即ち、彼らにとっては、銅器使用制限，收銅は、むしろ第二義的な問題であり、根本的に大事な問題は、逆に制錢が鑄つぶされて、黄銅器具がどんどん製造されているという現実の事態なのであった。云い換えれば、制錢材料の制錢鑄造以外の生産部門への流通こそ、最も恐るべき問題だったのである。そして、彼らのはげしいこの怖れの中から、逆に吾々は黄銅の制錢外への大量の流通，即ち、銅や白鉛の広汎な国内市場の形成をくみとることが出来るのである。事実そうであった。

大は嘉興の炉，湖州の鏡から，小は煙袋，鈕子等に至るまで，銅器の製造と流通は非常に盛んであった。浙江巡撫李衛は云う。「將黃色廢銅製作器皿，浙省獨多。如嘉興造炉，湖州鑄鏡，精緻工巧，遍處發賣甚廣」「円鏡所用頗多，止應許用有柄把之手鏡」「煙袋雖小，需銅亦廣，俱應嚴行画一」「鈕子等項細小物件……窮民工匠，藉此養活家口者，天下何止数万」⁽¹⁴⁾と。銅禁が励行されているさ中，山西巡撫石麟も「省城店舖，亦有貨売銅

器者⁽¹⁵⁾」という事実を承認しなければならなかった。大体、この禁令の施行は北京から始まり、省城え、ついで、各府州県へと拡大されたのであるが、その出発点である北京の実情について、乾隆9年、鄂爾泰らは上奏しているのである。「查京城内外八旗三營地方、現有熔銅大局六処、銅鋪共四百三十二坐、内貨売已成銅器不設炉鋪戸六十八坐、有設炉鋪戸三百六十四坐、逐日熔化打造〔銅器〕⁽¹⁶⁾」と。鑄銭のための政府市場以外に、広汎に成立していた民需市場—これこそ、雍正朝官僚群が強行しようとした銅禁政策を破産させた客観的現実の外ならなかった。

そして、同じこの客観的事態こそ、亦、銅・鉛廠民をして、政府権力の収奪をはねのけさせ、国内一般銅・鉛市場と結合することを可能にし、そして、かくすることによって彼らの私的利潤を産み出すことをも可能にする客観的現実でもあった。何よりも、それは、彼らが、政府に買いとられるよりも、比較にならぬ程の価格で売る事を許した民間市場としてあらわれる。たとえば、雍正8年、広東省順徳県の例だが、一千文の制銭（公定価、銀1両）を銷毀すると、重さ9斤余の黄銅が取れ、そのまゝ地金で売っても1両4,5銭で売れ、これを煙袋に加工すれば、更に「その利数倍」したのである。因みに、重さ9斤余の黄銅地金の民間市場価格1両4,5銭⁽¹⁷⁾を、1斤せいぜい2,3分から4,5分で強制的に買い上げられたあの雲南の銅価と比較してみよう。仮りに政府買上げ価格を1斤5分としても、9斤では4銭5分に過ぎない。1両4,5銭と4銭5分、こゝに政府権力の収奪の深さが示されている反面、民間市場の大きい展開が語られている。而も、一千文の制銭を銷毀した場合のこの9斤の銅は白鉛と化合させられた黄銅であり、純粹の紅銅分は9斤の6割、即ち5.4斤程しか含まれていないことを思えば、一層、市場価格の相対的な高さが判明しよう。乾隆時代の湖南では、政府買上げ公定価格は雲南に比べてやゝ高く、毎百斤、12両、従って毎1斤、1銭2分の規定ではあったが、本質的な事態は雲南の場合と全く同様であった。乾隆16年、駅塩道沈偉業は桂陽州の銅炉戸と官価と

民間市場価格についてこう語らねばならなかったのである。「煉銅各炉戸類，因銅尽官収，所得官価，無多余利，均不踴躍。其奸滑者則又百計走漏，雖設卡稽查，究意漫山遍野，曉伏夜行，迂程遠道，不必經由卡路，恐仍不一而足。聞漢口時価，每銅百斤，売二十余両不等，視十二両之官価，獲利幾倍。故不肯甘心安分尽数交官…」⁽¹⁸⁾と。不当に安い官価の幾倍もの私利を保証する民間市場の展開。かくて銅鋳業者（炉戸）の密売＝市場結合の意欲が必然的に産み出され，それを必死に抑えようとする官憲の様々な努力（この場合，卡＝見張所設置による嚴重な市場封鎖）に対して，炉戸達の斗いが，「漫山遍野，曉伏夜行」という形で展開される。他方，銅・鉛の確保を至上命令とする国家権力も，炉戸達の斗いを黙視するわけにはゆかない。当然両者の対決が，必然的，法則的に打ち出されざるを得ない。そして，その対決のし方にこそ，清代銅・鉛私営企集の発展方向を示してくれるに違いない。逆に云えば，私営鋳業各層の国家権力との対決＝斗いの過程を抜きにして，中国の諸研究者の様に，たゞ，貨幣形態や，労働者数や，企業形態などを論ずるだけでは，単なる構造論であり，歴史的な清代銅・鉛鋳業の発展過程を位置づけ得ないであろう。では，その対決は具体的にどの様に展開されたか。

すでに本稿（11頁）でみたように，雍正4年4月，雲南銅鋳業が発展期に入ってから間もない頃，巡撫鄂爾泰は，銅100斤につき3両の銅息とそれが兵餉にとって占むる大きい役割とを上奏しながら，同時に，「新開之廠，恐衰旺無定，俱不題報，只就附近老廠作為子廠，隱匿抽減，弊遂百出」と奏さねばならなかった。即ち，廠民は，政府の諸々の収奪を座視していたのではなくて，どんどん新しい銅鋳山を開発し，官憲に登録せず，脱税と銅の私売（民間市場との結合）とを敢行していたのである。これ亦，すでに考察したように，王大岳は，康熙末年から乾隆末年まで，雲南銅鋳業は，名目は官廠だが，実は廠民が8，9割の私利を収めており，官価の多寡の如きは問題ではなかったと論じている（本稿11頁）。即ち，雲南銅鋳業

者達は、少くともその開発の初期から乾隆の末年まで、国家権力の収奪に対して、斗いを継続しており、豊かな私利を享受していたのであった。たゞ、雲南の場合、その斗いが具体的にどう展開されたか、不明である。以下湖南省について考えたい。

〔註〕

- ① 「雍正硃批諭旨」(以下「硃批」と略称。)浙江巡撫李衛,雍正5年10月10日の条
その他参照。なお前掲「東洋史研究」18の3の佐伯富氏論文。
- ② 「硃批」蘇州巡撫陳時夏,雍正6年正月29日の条。署湖広提督岳超龍,雍正7
年9月7日の条。
- ③ 「硃批」山西巡撫石麟,雍正5年12月18日の条。
- ④ 雍正帝は雍正5年蘇州巡撫の錢糧抵算の乞をしりぞけたが,6年,常賚の乞を
許可している。「硃批」蘇州巡撫陳時夏,雍正5年11月6日の条,及び常賚,
雍正6年正月8日の条。
- ⑤ 「硃批」浙江巡撫李衛,雍正5年10月13日の条。
- ⑥ 「硃批」江西巡撫布蘭泰,雍正5年11月18日の条。
- ⑦ 「硃批」蘇州巡撫陳時夏,雍正5年11月6日の条。
- ⑧ 「硃批」河南總督田文鏡,雍正6年2月2日の条。
- ⑨ 「硃批」蘇州巡撫陳時夏,雍正5年11月6日の条。
- ⑩ 「硃批」兩広總督孔毓珣,雍正6年8月4日の条。
- ⑪ 「東安県志」卷5,列伝8,李玉章伝。
- ⑫ 戸部尚書海望「請弛銅禁疏」—「皇朝經世文篇」卷52
- ⑬ 以下,この問題についての史料はいずれも「硃批」の各条参照。
- ⑭ 「硃批」浙江巡撫李衛,雍正5年10月13日の条。
- ⑮ 「硃批」山西巡撫石麟,雍正5年12月18日の条。
- ⑯ 「清代鈔檔」乾隆9年10月初9日鄂爾泰等奏。—「中国近代手工業史資料」第
1卷177頁。
- ⑰ 「硃批」広東布政使王士俊,雍正8年12月16日の条。
- ⑱ 「成案」卷12,「辦理磁廠各条規」

2. 「官利」に対する「私利」の対決

国家権力の重圧が主として、企業の縮少再生産にまで追いこむ程の、高率収奪＝不等価交換と強制買上げ＝市場遮断との二面から加えられたことに対応して、企業内各層の国家権力との対決のし方も、重税への斗い＝脱

税斗争と、私売＝市場結合斗争の二点に重点がおかれたのは当然であった。

先ず、廠税徴収者と銅・鉛請負者を兼ね、政府から諸種の特権を与えられ、採掘業者（以下砂戸人と総称する）や精煉業者（以下炉戸と総称する）に君臨していた「商」＝「官商」＝特権商人についてみよう。彼らは、一方では、政府の代理人として、一般砂戸人から砂税を、客販及び炉戸から銅・鉛税を収奪し、亦、政府から炉戸に支払う工本銀を中包するなど、基本的生産業者（砂戸人及び炉戸）を、前期的商業高利貸的に圧迫したが、他方、炉戸に資本を前貸することによって、精煉業と密着し、更に「厚挾資本、招集砂夫、慫慂富戸、合夥開採」と云われるように、豊かな合股資本を擁した最大の採掘企業家でもあった。⁽²⁾それ故、企業内各層の中で、彼らは、確かに権力の座に近く、その事は亦、重大ではあるが、同時に、投資集団の代表である限り、彼らも、政府の重税に反対し、民間市場との結合をめざさねばならぬだろう。事実そうであった。たとえば、乾隆8年から10年までの3年間、湖南省銅・鉛業の中心地、桂陽州の銅・鉛を一手に承弁していた戸部商人、易経世を例にとってみよう。彼は政府から与えられた特権商人としての地位を利用しつゝ、他方、巨大な採掘企業家として、乾隆8年から3年間、自己経営の採掘場から生産した銅礬石を毎100斤銀6分乃至3錢6分の価格で、炉戸に売りながら、戸部には平均僅か1分5厘で売ったと報告、その差額と脱税分を全部私利として取得していたのである。⁽²⁾彼の私利取得が余りにも多額、且つ長期に亘ったため大問題になったが、調査に当たった知州達が「此中明有礬夫聽受奸商易経世之私嘱、故意多率情弊」と断じていることは明らかに彼が礬夫＝採掘労働者に命じ、⁽³⁾それとの協同の下に私利を計ったに違いない。估砂権一即ち、礬石の品質と価格、砂税を決定する権利を与えられていた特権商人としての彼には、自らの或いは他の砂戸人の礬場から生産される銅礬石の質と価格とを偽って、莫大な私利を収める事は容易であったろう。所で、砂戸人と炉戸の間に礬石の売買が行われる際、特権商人には、勾砂銀乃至紅票銀と称された

附加税を炉戸から取得する権利を与えられ、一般にその取得額は莫大であった。従って、易経世の場合、砒石の価格を正当に評価すれば、劣質に評価⁽⁴⁾するよりも、はるかに多額の「勾砂銀」「紅票銀」を炉戸から取得出来たにも拘らず、この附加税が減少するし方で、砒石を劣質に評価し実際は高く炉戸に売っていることは、易経世が、官権力への寄生的存在としてよりも、むしろ官権力に抵抗的な私的採掘企業家としての存在により大きな私利を見出していることを物語っている。かくて彼は「奸商」と刻印され、特権商人身分から追われた⁽⁵⁾。そして、この事件を契機に、乾隆10年冬同州の商辦制は官辦制に切り換えられ、更に、この問題は後述の「官囲」⁽⁶⁾＝炉戸囲いこみ問題のきっかけともなった。しかし、政府も商制なしには銅・鉛の確保が困難であり、乾隆13年閏3月、再び商制を復活、改めて招商しなければならなかったのである。そして、その後も、乾隆17年、布政使達が「商人従前売砂登簿之時、少上砂数、利其侵瞞税銀、兼可朦蔽銅鉛錫」と嘆ぜざるを得なかった⁽⁷⁾彼らの活動が続く。即ち、彼らは、自己の砒場から生産した砒石の中、優良砒を少く官憲に報告し、実際は砒質通りの価格で、炉戸に売ることにより、砂税(砒石を売るときにかけられる税金)を脱税しつゝ、私利を確保しつづけたのであった。而も、見らるゝように砂税を脱税するだけでなく、私銅や私鉛まで入手して莫大な利益を得たのである。無税の上砂を炉戸に廻わし、本来なら官価で炉戸から買い上げて、省武府に納入すべき銅・鉛を、ひそかに炉戸から買い上げて、民間市場に密売したと思われる。桂陽州の銅炉戸と特権商人のつながりは後に述べるが、今、永く郴州鉛廠を支配していた戸部商人陳開業を例示しよう。彼は、郴州的各白鉛炉戸が、毎月450斤を生産し、従って2割の税率によって、各炉戸から毎月90斤の税鉛を徴収し、省政府に納入すべき義務を負いながら、各炉戸の月産額を350斤と官憲に報告、70斤の税鉛しか納入せず、更に各炉戸から余鉛を毎100斤3両6銭で買い上げ、4両2銭で州外に販売していたのである。乾隆16年頃の事であった⁽⁸⁾。因みに、当時、郴州

での白鉛政府買上げ価格は3両3錢3分であり、而も、炉戸の税鉛も陳開業に売った方が、官憲に納めるよりも減少したと考えられるので、陳開業の如上の脱税は、可成り大きい利益を白鉛炉戸達に与えたと思われる。陳開業が脱税と余鉛販売を通じて更に一層大きく儲けたことは疑いない。かくて、銅・鉛鋅業内における政府代理人たるべき特権商人達が、不断に私利追究者であったことが理解されよう。

次に官商よりも特権の低かった「客販」達はどうであったろうか。彼らは鉛炉戸が、生産額の2割を省政府に納入した残りの8割の余鉛を炉戸から買い取り、国内市場に売る権利を合法的に認められていた。⁽⁹⁾たゞ、その際余鉛販売の許可証として「府記」（府署の証明印）を貰わねばならないのが規定であったが、彼らは府署の認可を受けることなく、「府記」を私造して、鉛を市場にどんどん流していた。⁽¹⁰⁾即ち、2割の課鉛を脱税すると同時に、民間市場と直結しつゝ、大きい利潤を得ていたのである。

砂丁（採掘労働者）達も例外ではなく、掘り出した砵石をひそかに隠匿して、利益を収めた。たゞ、彼らの密売は小規模であった。即ち、隠匿した礦石を炉戸に闇流しをし、その代償に食料や塩菜を炉戸から貰ったのである。⁽¹¹⁾

頭人として、砂丁の管束を義務づけられていた夫長層の闇流しは大きかった。「夫長帶頭，奸良不一，…有砂夫於壠内挖出好砂，彼此串通，仮言炉戸不買，堆貯壠口，不挑入壘，希図私売漏税」⁽¹²⁾と地方官が語っているように、夫長や帶頭が大勢の一般砂夫を陣頭指揮して、上質の砵石を採掘現場に隠し、炉戸に私売したのである。言ってみれば、特権商人—夫長—帶頭—砂夫、即ち採掘部門各層の全員が巨大な脱税・私売集団だったのである。かくて、取締官が「(郴・桂二州の)銅鉛各礦山場，地方広闊，現在四处開挖壠口，其地名多有未經報出者，路径紛雜，透漏課税」と嘆じ『莫可究詰』⁽¹³⁾と述懐しなければならなかったのが実情であった。

所で、採掘部門各層による右の如き脱税・私売礦石は当然、砂税ぬきの

安い価格で、炉戸の手に売られ、そこで精煉され、政府の諸種の収奪を免れた私銅・鉛として民間市場に流れることが予想されよう。事実そうであった。先の拙稿（『東洋史研究』17の1）で見た通り、炉戸達は「一等窮民」を雇って（彼らは挑夫とよばれた）、採掘場から砵石を炉房に運ばせるのが通例であったが、夫長、砂夫達は往々、自分の父兄子弟を「挑夫」に当てたのであって、官憲や胥吏の眼もそこまではとどかず、白昼公然と脱税砵石が炉戸の手に売られていたのである。勿論、炉戸と砂戸人の礦石売買の際には、估砂権を握っていた特権商人が鋳石の質と量を検査し、官憲に報告して、炉戸・砂戸人から夫々、規定の税を徴収し、特に銅炉戸の場合はその生産全額を特権商人が買いとって省政府に納入するのが規定であったが、本稿でみた通り、特権商人自身が脱税・私売者であったから、炉戸の手には、無税、砵石が入り、従って亦、安価で強制的に買い上げられることのない私銅が炉戸によって生産されたに違いないのである。政府の規定通りに大人しく精煉し、政府に買い上げられていては、「無多余利」（銅炉戸）、「折本して紛々停工」（白鉛炉戸）しなければならなかった炉戸達一而も政府府から支払われる銀両が、知州が省城の司庫から受領して、彼らの手に渡るまでには、早くて数ヶ月、遅ければ半年も待たねばならなかった炉戸達であったから、当然右の無税の砵石とそれによって生産される私銅こそ、彼らの再生産の維持乃至拡大のための必須物であった。それ故、官憲が最も怖れた事態一炉戸達の「走險私売」=銅の密売が、彼らの日常生産活動の欠く可からざる一環となる。官憲がいくら卡（見張所）を設けても「漫山遍野，曉伏夜行，迂程遠道，不必經由卡路」（本稿18頁），或いは「桂砵走私迷路甚多，稽查勢難周到…肩挑担負，夥伴多人」という彼ら自身の手による密売が敢行された。⁽¹⁶⁾

而も炉戸達だけで、密売が行われたのではない。前稿（『東洋史研究』17の1）で明らかにした通り、桂陽州の銅炉戸達は多く「客販」から生産資本の前貸を受けていたのだが、炉戸達が官権力の収奪に対決しようとする

るとき、客販—炉戸の支配—従属の関係も、炉戸達の私利を産み出す関係に転化する。——「炉戸多有先受客銀，受砂価・焼煉工本・飯食之資，…往往將煉出銅鉛錫觔，隱匿商通，客販私買，潛行走漏」——即ち、客販の市場ルートに炉戸達の私銅が乗せられたのである。という事は、冶銅部門の基本的な生産主体である炉戸が民間市場と自身で直結し得ず、「客販」=特権的商業資本に中間利潤を搾取される可能性を、一面では示している。事実、炉戸達、殊に雲南・貴州の如き、民間市場から極めて遠い礦場の炉戸達は到底その市場と直結することによって豊かな私利を挙げることは出来なかった。たとえば、雍正の頃、貴州省の丁頭山外二廠の白鉛炉戸の如きは、白鉛を每百斤8, 9錢乃至1両で貴州省政府に売っていたが、省政府は、その買い上げ値と漢口までの運賃を加算して、百斤につき3両5錢を布政司庫から支出したが、そのとき省政府が漢口で京商に売った価格は每100斤4両8錢であった。省政府の商業利潤は每100斤1両3錢、即ち、炉戸の売価の130%以上という高率であり、而もこのときの省政府の買い上げ総量は200万斤、従って、炉戸達が自ら漢口市場と直結した場合に比し、一挙に2万6000両という莫大な中間搾取をされていたわけであり、貴州省政府から每百斤4両8錢で買いとった京商（戸部の認可を得た官商）も更にその白鉛で中間利潤を得たに違いないことを思い合わせば、遠隔炉戸達の市場利潤獲得の困難さは想像に難くない。雲・貴に較べて、市場に近い湖南でも、程度の差はあれ、本質的には同様であった。郴州の白鉛を密売した戸部商人陳開業が、余鉛を官価より少々高い程度の価格で炉戸達から買い上げ、一層高い価格で民間市場に販売したことは本稿（21頁）で見た通りである。従って、炉戸と市場の結合が、特権商人を介して行われた場合、商人達によるきびしい中間搾取が行われ、政府の強制買上げ拒否=密売はそのまゝには炉戸達の再生産を支える私利とならなかったことは明らかである。従って、冶金部門の基本的生産主体であった炉戸達と「商」乃至「客販」との矛盾は、資本の貸借関係のみならず、銅・鉛の流通関係に

においても厳存していたのである。

だが、「商」や「客販」が官権力に従順であるよりも、炉戸と結合した方が有利であり、炉戸達にとっても、無税の砒石が「商」又は砂戸人から、有税の砒石よりも安く売られ、亦、銅、鉛が、政府に買いとられるよりも有利に「商」乃至「客販」に買いとられたのであるから、炉戸と「商」・「客販」の結合は相互の私利をもたらした事は間違いない。それ故にこそ、炉戸と「客販」の結合を官憲が「往往將煉出銅鉛錫觔，隱匿商通，客販私売，潛行走漏」（前出）と恐れ、これを問題にしたのであった。そして、こうした炉戸達の「商」「客販」と結合した、或いは炉戸達単独での、脱税、私売の過程においては、炉戸達にとっての主要矛盾は、「商」「客販」ではなくて、国家権力そのものであったとみなければならない。

かくて、「商」—「砂戸人」—「奸良不一」と称された夫長—砂丁—炉戸—「客販」の結合は、も早や一商、一客販の脱税、私売をはるかに超える動きであり、鑄錢材料の確保を至上命令とする官憲の黙視し得る所でない。当然、官憲は体勢をととのえて反撃に移らざるを得ない。

乾隆10年冬の「奸商易經世」の革退と、廠税の官憲による直接管理とがその前ぶれであった。勿論、既述したように、易經世の革退後3年目に再び「商制」を復活した程、官憲にも確信が無く、動揺をつづけていた。だが、易經世の革退と同時に省当局はひそかに中央（戸部）と連絡をとりつゝ、極めて重大な対策＝炉戸の囲い込み（後述）を決意、計画した。この対策はたゞちに実行出来なかったが、「勾砂」⁽¹⁹⁾、「紅票銀」（炉戸が砂戸人から砒石を買う際「商」に納める附加税）の官側への回収など「商」の特権の一部に制限を加え、亦鋅山地名の調査、砂税の根本である砂色（鋅石の質）の厳密な検査、砂戸人や夫長、客販、炉戸等納税者凡てに砂数、税額を記入させ、知州、藩司が的確に納税状況を把握するための「親填紅簿」の作製など⁽²⁰⁾、脱税、私売を防ぐ諸対策を徐々に進めた。そして、ついに乾隆17年10月から12月にかけて、湖南銅・鉛主要産地、桂陽州、郴州両

州の銅鉛全廠に対して、これまでにない強硬な管理強化策を打ち出したのである。

先ず、同知・通判を専員として廠地に常駐させ、「商」を上から直接監督する体制を取った上、(1)「商」の卡丁（見張人）雇傭権を官に回収し、(2)卡を増加し、(3)採掘場の出入口を一処にし、他の出入口を堵塞し、(4)估色（砒質の検査・決定）、収税、焼煉を一処で行う「総廠」を設置し、(5)採掘場の近くに柵囲を作って砒石を全部そこに運びこませ、毎晩これを閉じて砒石の密売を防ぎ、(6)「商」が砒石を炉戸に売るとき、委員が立合って登簿させ、(7)「客販」と炉戸の串通を嚴重に監視し、(8)炉戸には炉頭乃至炉総を、砂夫には夫長をもって夫々監視せしめ、(9)銅・鉛・錫の私売処罰を嚴重にする（40斤以上は徒罪）等のきびしい政策を決定したのである。因みに、宝南局用の銅はこれまで、湖南産のみではまかない切れず、⁽²¹⁾雲南銅の協済を仰いでいたが、この年（乾隆17年）、桂陽州産の銅だけでまかなうことが決定されており、この省銅自給方針を完遂する上からも、如上の管理強化策が打ち出され、その実行が要請されたのであろう。

所で、官側が直接卡丁を雇い、卡を増加して密売の防止を嚴格にすることは可能であるし、亦、実行されたようである。⁽²²⁾とくに、私銅・私鉛の流通ルートの要所（独石）に、官憲が直接管理権を握る嚴重な関所が設けられたことは、鑄錢材料の倍加に伴う多量の銅・鉛の強制買上げ、徴税の強化とともに、銅・鉛企業各層への打撃は大きかったに違いない。

だが、17年立案された管理強化策は果してどこまで実行されたであろうか。たとえば、その要点の一つ、「估砂・収税・焼煉」を一処で嚴格に行わせる総廠の如き、到底実行出来なかった。この政策が立案された一年後の乾隆18年12月、桂廠委員、通判鮑啓泌は「（桂陽州では黒鉛の煎煉を）婦人孺子，無不曉習，城鄉市鎮，無不常燒，家家日用器具，無不用此打造，平常油塩，多有用此兌換，既罔漏税之小利，又懼部鉛之賠累，所以商謀私造之計，無不入作，無地不然，…難以查拏淨盡」⁽²³⁾とその実情を描いている

のである。即ち、桂陽州の黒鉛精煉は、いかなる官権力を以てしても一処に集中・監視出来ぬ程、広汎な都市及び農村工業として成立しており、脱税、私造は到底取り締まれるものではなかったのである。かくて、実情を調査した鮑啓泌も「(私走の旱路＝陸路は)千途万徑，此緊彼疏，且奸徒夾帶之巧，如…上糞下鉛之例…竟有出人意想之外者」と嘆ぜざるを得なかった。私売のルートはいたる所に通じており、糞尿の下に黒鉛をかくすなど巧みな方法で、監視の眼をのがれ、どんどん民間市場に流出していたのである。そして、彼が「頑民」と称した密売炉戸に対して立て得た対策はたゞ法を厳にし卡役を慎選して実力巡查せしめることでしかなかった。事態は銅炉戸にとっても同様であった。否、銅の場合全生産物が省政府に買い上げることが原則としていただけに、官憲にとって最悪の状態が展開されていた。かの強硬取締策が立てられてから約2年後の乾隆19年7月桂陽知州富徳は云う。「桂陽廠銅斤，全賴綠紫崗，石壁下出產，以供鼓鑄。各廠設下派役，防範之法，已屬周密。其猶有走漏者，因卡役止巡守卡路，其卡路之外，崇山峻嶺，曠野偏僻之處甚多。刁頑炉戸以及在廠貿易之人，収有銅斤，或於夜間，或於下雨起霧之時，乘人之不能見，將銅藏於腰間，或裹於包內，攀山扒嶺而出，聚有成數，私運出境」⁽²⁴⁾と。即ち、見張所のある路以外高山峻嶺のすべてが炉戸及び商人達の密売ルートであり、夜間、或いは霧にまぎれて私銅が州外に運び出され、可成りの量に蓄積されたあと民間市場に転売されたのであった。いな、当時桂陽州第1、従って湖南省第1の銅産地であった綠紫崗の銅炉戸達は、特権商や在廠官吏の容認の下に、納入規定額の4割にも達する私銅を精煉し、亦、知州の親戚の家人の勢力を利用しつゝ、堂々と公印を押して州外に密売していたのである。老炉戸朱璞生はその実状をこう語っている。「小的們銅斤，連抽税在內，每石部價9兩6錢，實在不敷工本，故此商人同州裏管廠的人，每石多加銅砂四十斤，聽小的們煉銅私売，包補工本是實。小的們每月每人，売一軫。少者每年也売十軫。每軫每人私売五六十斤，通廠共有六十多人。都是一樣売

的。廠上管事的是汪太爺（知州汪度のこと）親戚相公家人，每銅一石，規礼銀二三錢，卡上一錢三分，都是買銅客人出的。至於州裡的親戚相公家人，打官号字，通知卡上。也是客人自己料理。客人收買了炉戸們的銅，湊成若干石数，他自己出合州裡管廠的親戚相公家人講話，臉面大些的也用二錢銀子，也有不到二錢的臉面大些的。…還有每石使三錢的……」
(25)

この老炉戸の生々しい言葉は実に重要な問題を提起している。第1に明らかなのは2割の税銅を含めて毎百斤の官価9両6錢（従って、附加税を除いて、規定通り省政府から支払われたとしても、百斤につき炉戸の手取りは僅かに7両6錢6錢8分—当時漢口の市価20両と比較せよ）という低価格収奪と私営炉戸のきびしい抵抗である。官憲の収買価格では「不敷工本」即ち「もとでにも足りない」＝「再生産は不可能であり、縮少再生産に追いやられる」という事態に対して、炉戸の私造、密売は必死の活動であつたろう。第2に、官利と炉戸の私利の矛盾をついて、特権商人が介入し私銅がその手を通じて民間市場に流出したのである。而も、今引いた老炉戸によれば、私銅の流出は乾隆13年以来、即ち易經世の革退後再び商制に復して以来、満6年に達する長期のことであり、この間休みなく、官銅の4割に及ぶ私銅が流出していたのである。そしてそれは管廠の官吏の公然たる容認の下であり、市場までの運銅（卡の通過）に必要な賄賂と管廠官吏に贈る賄賂まで商人が出すという厚い援助の下においてであつた。而も乾隆17年、省政府が管理強化策を実行しようとし、各種の脱税、私売に対してきびしい監視を励行しつゝあつたそのさ中においてであつた。更に云うなら、湖南省制錢鼓鑄のために最も大きい役割と比重を占めていた緑紫崗廠の全炉戸60余人が一斉に、6ケ年も脱税・私売を続けていたのであつた。鑄錢・鑄息＝兵餉をめざす省当局の銅政の矛盾が誰の眼にも明らかに露呈されたと断定してよい。

採掘、冶金両部門に亘る官権力収奪に対する如上の抵抗は、官利にとっては不断の危機であり、両部門の基本的生産主体—砂戸人・炉戸—にとつ

ては縮少再生産の途を克服し、私利を産み出して行く基本的な過程であった。

私は先に、零細資本の合股集団が採掘部門に涇集し、亦、富商大賈や廢拳の士、巨族紳衿も亦官憲の圧迫・防害を排して銅・鉛・銀・錫鋅業に盛んに投資した実情を描いたが（「東洋史研究」11の1）、それはあくまでも、砂戸人、炉戸を中心とする鋅業生産に私利があるからであり、中国の萌芽論者のように、国家権力の収奪面にのみ視点をおけば、各階級の人々が鋅利を求めて狂奔した事実さえ理解出来ないであろう。むしろ、湖南省の一地方官が、「煉鉛炉戸も煉銅炉戸も、名は不同だが、利を計る点では全く同一であり、……利の在る所、彼等に不煉を強制出来ず、利の無い所、煎練を強制出来ない」と語ったように（本稿12頁）炉戸（及び砂戸人）の私利—官権力の収奪に対する不断の、脱税、市場結合の斗いによって獲得される不断の私利追求の過程こそ重要であり、その過程にこそ、私営銅・鉛鋅業の発展の過程が秘められていたのであった。亦、私は次の論文（「東洋史研究」17の1）で、当時の銅・鉛鋅業の生産関係を分析し、複雑な賃労働の拆出過程と分業に基づく協業的な労働様式を考察し、亦、それらに対応する私的企業家の致富の過程を考えた。当代の銅・鉛業労働形態は、極めて古い性格を一面では内包していた。即ち、「親身弟兄」と称された砂丁（採掘労働者）は、「伙房」（寄宿舍）に集団的に居住させられ、採掘業が一定の成果を挙げるまでは食糧を支給されるだけで、賃銀の支払いはなかったし、獲砵後も、頭人層の恣意による比例配分的な支払を受けていた。のみならず、「鍋頭」（本稿での砂戸人）や頭人達のきびしい管束と鞭打ちの刑を受け、不時の災害に対する保障は勿論、移転の自由も持たなかった。しかし、明代にみられた軍人労働、囚人労働はみられず、親身弟兄形態でさえ、明確に賃労働に向って一步前進していたのみならず、この弟兄制とならんで、一層新らしい賃労働が発達しつつあった。「月活」と呼ばれた坑内常雇い工、「草皮活」と称された坑外常雇い工、「雇工」と名づけ

られた坑内臨時工達がそれで、彼らは親身弟兄労働者と違って、獲砒の有無に拘らず月給乃至日給を支払われ、且つ雇主たる鍋頭に自由に雇われ、自由に去る権利を確認されていた新らしい賃労働者達であった。こうした新らしい賃労働の形成と発展が冶金部門での雇傭労働者の形成・発展とともに、夫々鍋頭＝砂戸人及び炉戸の私利を産み出す鉱業生産関係内の内的要素であった。だが、賃労働収取者としての砂戸人、炉戸の私利は夫々砒石と銅・鉛を民間市場に販売することによってはじめて実現するものであり、その意味からも、本稿で考察した彼らの脱税、市場結合の斗いの過程が鉱業生産発展の重大なもう一つの要因となるのである。

かくて、新らしい賃労働、その分業に基づく協業にによる砂戸人、炉戸の企業は、その周辺に多量の単純小商品生産をめぐらせつゝ、マニユファクチュア企業として発展しつゝあったのではないかと思われる。勿論これはまだ一つの推定乃至みとおしであって、それを確定するには幾つかの問題が残されている。第1に、マニユの成立・発展を可能にした様な銅・鉛鉱業生産力の発展・上昇があったかどうかであり、この基本問題については、中国の萌芽論者も一切論及していないし、今の所、筆者にも不明なのである。第2に、本稿で考察した所の、官権力の収奪に対抗しつゝ行われた私利追究の過程が鉱業内のいかなる層によって主導的に行われ、且つその私利がどの様に拡大再生産に転化されたかについても亦、本稿では明らかにされていない。即ち、国家権力の代理人としての一側面を内包しつゝ同時に私的採掘企業家でもあった特権商人層、乃至同じく国家権力への寄生性を多分に持ち、往々頭人身分から特権商人に上昇した頭人企業者層が、⁽²⁶⁾私利追究と資本蓄積の過程を通じてマニユ資本家へ発展して行ったのか、或いは、非特権的一般砂戸人乃至炉戸が、国家権力への対抗の過程で、特権商人及び頭人層（本稿での湖南省の夫長層）を利用しつゝ、民間市場との結合を通じて私利を蓄積し、拡大再生産を行うことによってマニユ資本家に上昇したのかどうか、これらについても、今の所、筆者には明確では

ないのである。従って、康熙から乾隆中・末期に到る清代銅鉛鋅業のマニファクチュア的発展の過程の問題は今後に残りの問題を残している。

たゞ、賃労働の新らしい形成、発展、分業に基づく協業による労働形態を、本稿で考察した企業内各層の私利追求の過程と総括して考え合わすなら、少くとも、萌芽否定論者のような旧態依然たる停滞論は否定さるべきであり、清代初・中期の銅鉛私営企業の発展はまぎれもない事実であったと考えざるを得ない。

そして、重ねて云えば、私営企業の私利追求の過程過は、当然、官利とそれをめざす清朝の銅・鉛政策との矛盾を深め、その危機を招来する。以下、その対立を通じて、清代中期の銅鉛私営企業がいかなる変貌をとげて行つたか、その一端を、同じく湖南省桂陽州の銅鋅山である緑紫凶廠、及び石壁下廠について具体的に考えたい。

〔註〕

- ① 前掲「東洋史研究」17の1の拙稿参照。
- ② 「成案」卷11, 「銅砂煎煉銅鋳建設官園委州同督率工本不敷於司庫預給一切弊竇嚴行查究」
- ③ 同上。
- ④ 前掲「東洋史研究」17の1の拙稿。
- ⑤ 「成案」卷11「嚴飭郴桂二州出產白鉛余鉛歸官買不許轉售客販」及び卷12「辦理砵廠各条規」
- ⑥ 「成案」卷13「勾砂紅票銀兩解司充公并嚴禁毋許私収」
- ⑦ 「成案」卷13「砵廠議辦各条規」
- ⑧ 「成案」卷12「辦理砵廠各条規」
- ⑨ 「東洋史研究」17の1, 拙稿。
- ⑩ 「成案」卷13「郴桂砵廠銅鉛有拏獲私銅一百斤至一千斤者分別獎賞」
- ⑪ 「成案」卷12「辦理砵廠各条規」
- ⑫⑬ 「成案」卷13「砵廠議辦各条規」
- ⑭⑮ 「成案」卷12「辦理砵廠各条規」
- ⑯ 「成案」卷13「桂砵偷漏銅斤水口惟焦源河口總卡移建独石以資水旱兩路巡緝」
- ⑰ 「成案」卷13「砵廠議辦各条規」
- ⑱ 「東洋史研究」11の1, 拙稿。

- ⑲ 「成案」巻13「勾砂紅票銀兩解司充公并嚴禁毋許私収」
- ⑳ 「成案」巻12「辦理砵廠各条規」
- ㉑ 「成案」巻13「砵廠議辦各条規」
- ㉒ 本節註⑬参照。
- ㉓ 「成案」巻14「飭查桂廠白鉛黒鉛及緑紫礱石壁下等处一切偷漏各条」
- ㉔ 「成案」巻15「白沙梅田地方添設卡役稽查私販銅鉛」
- ㉕ 「成案」巻14「桂陽州銅鉛出產地名各条」
- ㉖ 「東洋史研究」17の1，拙稿

四．国家権力による反動再編成とその意義

1. 炉戸囲いこみと炉戸の斗い

既に見た通り，採掘，冶金両部門を通じて，脱税，密売の抵抗に直面し，その銅，鉛政策の危機に追いこまれた湖南省当局は乾隆10年特権商人易經世を革退し，同時に銅・鉛鋳等を直接管理する諸対策を実行しようとしたが，更に，翌11年4月，新らしい対策—炉戸の囲いこみ—の準備に取りかかった。桂陽州知州汪度らが推進力となり，省の銅産中心鋳場，緑紫礱の炉戸10名を選抜して，土墻をはりめぐらした「官囲」の中に囲いこみ炉戸達の脱税，私売を完全に絶ち切るという強硬策であった。即ち，官囲内に囲いこんだ炉戸達に，司庫から工本銀（生産資本）を前貸して精煉労働者を雇わしめ，必要な柴炭を購入させ，銅砂は委員自ら估砂人（砵質監定人）と夫長を帯同して砵質を厳密に估定した上，官囲内に運びこませ，その数量を州簿に記入させ，夫長の砵石私売，炉戸の銅斤私売は更に不時厳査するという徹底したものであったのである。而もこのとき現地当局はひそかに中央（戸部）と連絡をとり，「現有炉戸28座」を凡て官囲内に囲いこみ，佐雜員一名を廠内に住宿させ，炉戸，砂戸人らの私売を不時監視させ，とくに私売炉戸に対してはその私炉を打ち毀す方針を決定している。²³⁾だが，上記選抜10炉戸の囲いこみさえ，この時は一時的な試行にとどまり，まして官囲拡大方針は実行されなかった。その間の事情，全炉戸囲い

こみ方針を失敗に終らせた力が何であったか、不明であるが、後述の石壁下大有壠の例に照して考えてみると、旧い歴史と湖南随一の力を備えた緑紫崗炉戸達のはげしい反対と抵抗があったことは推測し得る所である。とも角、炉戸達の私営性、商品生産性を全面的に否定しようとするこの省当局の意図はこの段階では実現されず、却って、既述の通り乾隆13年閏3月、再び「商」を承充せざるを得なかったのである。だが、あくまで鑄銭材料の確保を至上命令とした支配階級は、とくに前章で述べた如き各層企業家のもろもろのはげしい抵抗に直面して、ひと度決定した基本方針を容易に捨て去る可くもない。果して、前述した乾隆17年の全般的な管理強化対策を施行したその翌18年、炉戸囲いこみ政策が重要な比重を帯びて再登場する。同年6月、湖南巡撫が「壠口出砂、運入官囲、計石抽税、及応設卡処俱已周密、毋庸再議、惟是炉戸焼煉銅斤、尚無稽查之法、不過扯算砂色高下……難免隱漏⁽³⁾」と述べているように、採掘場には官囲を設け亦見張所を整備して砂戸人の砒石私売は防止するめどがついたが、省当局にとっての最大の怖れは、炉戸の私売を防ぐ方法の無いことだったのである。かくて、巡撫は布政使と衡永道にこの問題に関する意見を徴した上、特権商人に命じて、緑紫崗から外部に通ずる要路三処に土塘を添築させ、炉房をその中に囲いこんだのである。三路に夫々柵門が設けられ、その鍵は在廠の専員が保管し、夜門を閉し朝開き、協弁の州同に昼夜稽查の責任を持たせるという嚴重さであった⁽⁴⁾。だが炉戸を囲いこむことによってその脱税、私売を完全に抑えようとするこの強硬策も、結局、緑紫崗では成功を収め得なかった。既述の通り、その翌19年、炉戸達が省に納入を規定された総額の4割に達する私銅を市場に流出させ続けていたことが発見されたからである。18年の炉戸囲いこみ策の実行はむしろ、緑紫崗60余家の全炉戸達の脱税と民間市場結合への意欲がどんなに強く、逆に官権力の象徴である土塘の力がどんなに弱くもろいものであるかを白日にさらけ出したのであった。而も、巡撫の命令で土塘添築の責任を負ったその特権商人そ

のものが、管廠官吏を抱きこんで、炉戸の私売をひそかに援助していたのであるから、まざまざと官権の強制力の弱さが暴露されてしまったという外ない。そして、かかる自らの統制力の暴露にも拘らず、このとき、省当局は「商」制の廃止も敢行していない。而も一というよりは、それ故にこそ、省当局は一層、炉戸管束政策を強化し、官利と民利の矛盾の激化をより暴力的な形態で解決しようと焦った。

それは、緑紫崗の囲いこみに最后的に失敗した乾隆18年から数年後、緑紫崗の炉戸達より一層弱い拡散炉戸に対して、次のように敢行されたのである。⁽⁵⁾

緑紫崗廠とならんで桂陽の主要な銅産地であった銅山の石壁下廠——その石壁下廠の子廠の一つに大有壠という銅山があった。乾隆26年、李光華外数名の夫長（頭人）集団の合資によって正式の採掘が開始されたが、この銅山の砵石を買って銅を精煉する44家の炉戸達は、比較的に一地帯に密集して一つの鉱業町を形成していた緑紫崗の炉戸達と違って、「四郷（四方の田舎）に散処し」「家室に就て設炉している」いわば拡散炉戸達であった。家族労働を主体とする小商品生産者達であったに違いないが、それ故に亦、省当局の監視の眼がとどきかね、不断に私売を行っていたのである。その上、彼らは26年以来、砵石の買価を省当局から強制的に預給（前貸）されていたので、当局に負っていた義務は重く、私銅私売の道こそ企業維持の唯一の途であった。当然、省当局と44家の炉戸達との対立が開業のはじめから萌していたのである。桂陽州歴年の管廠委員達は布政使と緊密な連絡をとりつつ、これら拡散炉戸の囲いこみを執拗に策していた。だが、炉戸達の拒否も亦断乎たるものであり、当局のきびしい強要に対して「動則鳴鑼宰猪，聚党罷炉」一即ち、ドラを叩き豚をほふって反抗の氣勢をあげ、仲間を集めてストライキ（煉銅の中止）を行うという対抗策をとり、口々に「我等不焼，即召募，無人応召。銅從何出，官亦無奈如」一即ち、「吾々が銅を生産しないと、政府が別の炉戸を召募しようとしても誰も応じはしな

い。一体銅はどこから出るか。官(権力)を以てしても施す術がないのだ」と公言してはばからなかったのである。更に、あくまで強制的に一处に囲いこむなら「告退」即ち、炉戸たることをやめてしまうという強い態度で官憲に対決した。かかる両者のはげしい対立、炉戸の抵抗が数年も続いたあと、乾隆32年度の桂廠委員鄭士拔(署岳州府同知)が「各(委)員念銅勛為重、恐致停炉、弁理反多掣肘、仍其旧」と上官に報告している通り、省当局も、炉戸達の反抗がストライキとなって爆発すれば銅斤が入手出来ないことを恐れ、この数年間、彼らを拡散のままに任せ官囲への囲いこみを断念せざるを得なかったのであった。

だが、その間、夫長李光華らは五カ年に亘って計万余の資本を投じて大有壩採掘場の整備につとめ、32年頃には日産砒石100石(1石は100斤)をあげるに到った。31年には同廠の日産16・7石と報告されているから、まさに飛躍的な増産であったと云える。因みに官憲側は同壩の砒石100斤からの産銅量を3斤10両と計算して、炉戸からの収買銅量を決めているから、このままの砒石生産が続けば、官側としては毎日平均400斤近く、従って年額14万斤以上の銅を炉戸達から収買し得ることになる。他方、30年代に入った頃には、湖南省の重要鋳業地帯桂陽、郴州の銅・鉛とも産額は衰退の一途をたどり、一たとえば31年には、かつて省最大の産銅地だった緑紫崗廠でさえ、地表に近い優良砒石を掘りつくし、爆破作業で一二三十石の日産がやっと、という状態(しかしなお、大有壩よりも多量に生産していた)であったから、大有壩砒石の精煉の成否如何は、省当局にとって致命の問題であった。その上、頭人李光華達採掘企業家集団は大有壩以外にも採掘業を拡大し、漸く成果があがってきたため、その方面にも毎日10両の資本を投ずる必要があり、従って、大有壩の砒石を高く売ることが要請されていた。買砒資本を強制的に省政府から受け取らされ、その代償にきびしく銅を買い上げられていた44家の炉戸達と官権力の庇護を受けていた夫長企業家集団との矛盾、対立も次第に激化、ついに32年6月、それ

が爆発する。

炉戸達は史明達外数名の指導的炉戸を先頭に立て、桂廠委員鄭士拔に二つの問題を請願した。一つは夫長達の砂価が不当に高いから公正に估色した上、値下げをして欲しいということであり、一つは、省政府の資本前貸を辞退し、自分達の手で資金を調達したいということであった。因みに、炉戸達には廖奇玉、武生秦海なる者がバックアップしており、李光華らは廖を「訟棍」だと称している。或いは彼らが炉戸達に資本を提供しようと申し出ていたのかもしれないがその点は不明である。

郴、桂両州からの銅・鉛等の入取難に直面していた委員鄭は断乎として炉戸達の請願を拒否し、砂価については「試煉」した上で決定するからお前達は増産され堆積したまま放置されている砵石を毎日受け取って早く焼煉せよ、違抗すれば嚴罰に処するぞと言い渡した。炉戸達は試煉もしないうちにどうして砂価を決定するのかと反問し、緑紫崗廠のように先ず驗砂してから砂価を決定して欲しいと重ねて請願した。鄭委員の引用している炉戸達の言葉を丹念に読んでみると、試煉もせず、估色もせずに精煉を続行すれば、あとでどんな砂価をふっかけられるか、それが怖ろしい。亦、かかる不安な事態を招く根本は吾々が砂価を自備していないからだ、どうか前貸はやめて欲しいという意味がはっきりとくみとることが出来る。ここで、鄭委員も炉戸達も「試煉」という言葉を使っているのは李光華ら夫長集団が急激に増産してまだ品質も砂価も不明な砵石を大急ぎで炉戸に精煉させようとした事情を物語っており、亦、逆に、同じ時期の緑紫崗の炉戸達がより有利な条件を依然として確保していたことを示している。而も大事なことに、右の要請をした中で炉戸達は「蟻等（てまえたち）窮民有利可趨、失本難填」と云い切っており、あくまで委員や李光華らの主張が炉戸達の「利」を損ね、「本を失す」（縮少再生産に追いこむ）ものであるという立場から請願を行っていたことがわかるのである。それ故、委員も重ねて彼らの要求を拒否し、とも角精煉せよ、砂価については銅が生産

されてから決定するという態度を変えず、前貸についても炉戸達の要請を蹴りつづけた。

かくて、炉戸達は精煉を放棄し、鄭の表現に従えば「復又倡衆，欲每三日四十四家公司合過，持刀阻撓」というはげしい反抗に立ち上ったのである。委員は指導的炉戸史明達を責懲した。この間、李光華らは委員に、炉戸達の反抗が「致令人夫散心，迄今二十余天。所出之砂，毎日不過三・四十石」と訴え、亦、別の通風坑を開発中で、漸く成功しかかっているが、日々十両も資本を要し、このまま炉戸達の抵抗が続けば吾々の「氣尽力竭，万難支持，水夫子伙（排水及び採掘労働者）勢必星散，壠之成敗，介在旦夕」であるから、「国課民生」を阻害する炉戸達に官憲が強硬な処置を取るよう請願した。炉戸達の官権力及び夫長らに対するはげしい斗いを眼の前にみて、採掘労働者達も「散心」し20日の間に砵石産額が3・4割にがた落ちしたのである。「散心」と簡単に伝えられている言葉の中に、急激な増産要求の過程で、きびしい職制を通じて夫長らに収奪されていた砂夫達の、炉戸の斗いに対する厚い共感と支援、及び彼ら自身の企業家集団への抵抗がくみとれよう。ともあれ、炉戸と採掘労働者の反抗によって、李光華らの企業の危機は文字通り旦夕に迫った。そして、それは省当局の危機でもあった。

李光華らの右の要請によって委員達の態度は一層強硬になった。しかし、炉戸達は砵石運搬人夫6名を採掘場附近の囲内—ここで估砂し炉戸に売られるべきであったが—に派遣、一応砵石を囲外に運び出しはしたが、依然焼煉することなく、それを囲外に堆積し、且つ砂価の支払を拒否するという策に出た。委員は「阻撓廠務，挾制官長，刁頑已極」と断じ、書役を派遣して戸毎に砂価を強制徴収し、併せて指導的炉戸史明達ら4名を逮捕した。官憲が砂価を取り立ててくれた上、指導者弾圧を開始したのに力を得て、李光華らは再び自己の見解と打開策を上申した。即ち一炉戸達には元来砂価を支払う資金がない。従って省政府から砂価の前貸を受けてい

ることは感謝してしかるべき恩典なのだ。しかるに彼らは訟根と結び「工本の前貸は吾々の生産には害がある。吾々の手で砂価を整えよう」とほざいているのは全くけしからんことだ。省政府からの前貸は利息なしの資本であり、彼らが自備する資本には必ず高利の利息がついているにも拘らむ、前貸を拒む真意はどこにあるのか。前貸を受けなければ「免欠官債、好売私銅」即ち、課税と強制買上げによる政府への負債を免れ、私銅が売れるからに外ならない。そして「私銅之価、倍於官銅」なので、官から前貸を受けてそれに束縛されるよりも、民間から資本を借りて政府の制約を受けないことこそ彼らの抗官の本意である——これが李光華らのこの問題に対する見解であった。吾々は夫長群・省政府に対する炉戸達のはげしい斗いの本質がどこにあったかを夫長らの上の生々しい言葉を通じて伺うことが出来よう。云うまでもなく、官利＝「砂価前貸による強制的低価収買と重い課税」に対する炉戸達の私利＝「私銅の確保、自由販売と重税拒否」との斗いであり、この場合炉戸達は有息の民間資本を個人的に借りても省政府の前貸は断わるという峻厳な態度に出たのであって、夫長群・官権力に対する商品生産者としての彼らの私利の矛盾が激化していた実情をくみとることが出来る。そして両者の争点が本質的な問題にかかわっていただけに、両者の間には最初から妥協の余地は一切無かった。現に炉戸達は砂価を少し安くしてくれれば省政府の前貸を受けようとは言っていないし、亦、省政府の前貸を受けるから銅の一部を自由販売させて欲しいとも要求していない。あくまで、砂価の前貸とそれに密接に関連する官憲の全収奪体系に対する、及び、驗砂もしないで強制的に精煉させようとする夫長群の不合理な無理強いに対するはげしい斗争があるだけであったのである。それ故に亦、官憲と夫長群とのこの問題に対する態度・対策も亦妥協を許さぬ程のものであった。即ち、李光華達は合議の上、省政府に対して次の如き解決策を申し出たのである。——1. 新しく炉20座を増設すること。但し新炉一座につき設備資金50両、計1000両を要し、かかる莫大な資本はと

うてい自分達ではまかなえないので、国帑を前借し、2年以内に銅で返済したい。(但し、夫長達が返済するのでなくて、応募炉戸達が返済の義務を荷わされたことは後述する。) 2. 砒石を省政府で買い上げて貰い而もその砂価を前借りし、これ亦銅で返済したい。3. 新設の炉戸をすべて官囲内に囲いこみ、四路に見張所を設けて不時巡邏すること。以上の3条件が容れられるなら幸い、自分達の意のままになる八家の炉戸が採掘場内に居るので(因みにこの8炉戸を李光華達は自らの「内夥」とよんでおり、その直接的な支配下にあって、囲内に集中しており、今回の44戸の拡散炉戸達の斗争には参加しなかった。採掘企業家であった李光華達が同時に精煉をも支配していたことがわかる)——1カ月内に20炉を設置し、計28炉で、2カ月で砒石を整え、3カ月後に銅を省政府に納入しよう。而も、従来、砒石1石につき銅3斤10両の割で納めていたのを、銅4斤に増して納めることが可能である。四郷の拡散炉戸がたとい「呈刁」しようとしても、銅は「偷漏」し難く、「鼓鑄」(制錢鑄造)用の銅は必ず確保される一と。

終始李光華側に立ち、「刁頑日甚，同心合意，彼倡此和，……現在欠銅二万数千斤之多」という炉戸達のはげしい斗争に注視を怠たらなかった鄭委員は、上の如き夫長らの提案を全面的に容れるとともに、自己の見解を附して、一層きびしい解決策を省中央に具申した。即ち一砒石を驗査した上で砂価を決定し、自らの資金で夫長から砒石を買いたいという炉戸達の要求は絶対に容認し難い。何故なら、彼らは官金の前貸を受けている時でも銅の納入を怠り、「恃衆抗違」していた。その彼らに自己資金を用意して砒石を買うことを許せば、銅の納入がますます減少することは必至であるからである。而も資本の自備に乗じて、中・下等の砒石を硫石(劣悪砒)と偽わり、ために正税は減少し、且つ中・下等砒が正砂に入らないため、彼らがいかに程煉銅しているかわからなくなり、当然、偷漏(課銅の脱税)と銅の私売が行われるからだ。備本買砂の請は断じて許すべきではない。ではこの問題との解決はどうすべきか。もし炉戸達をこれまで通り四郷に

散処させておくとは必ず、「銅廠之弊藪」となる。唯一の方法は炉戸を官囲内に囲いこむことであり、而も現在の炉戸を囲いこむとは必ず抵抗し、総罷業するにきまっている。附近の人はすべて彼らの「親友」であり、召募によりたとい1・2人が応募しようとしても、彼らから損こそすれ益がないと吹きこまれるに違いない。そこで、李光華らの解決策を全面的に容れ、彼らに添炉資金と砂価を前貸してやり、遠方から炉戸を召募して、囲内で精煉させるべきである。同時に、拡散炉戸に対しては、彼らが運び出して焼煉していない砒石を一人一人責任量を決めて強制的に焼煉させ、新旧の欠項（省への未納の銅斤と課銅）をすべて清算させた上、現在の拡散炉を全部叩きつぶしてしまうべきだ——と。

省当局は鄭委員のこの提案を全面的に認可、ただちに李光華らに一炉50両の割で帑金を前貸してやり、囲内に新炉を添設せしめ、遠方炉戸を召募するとともに旧拡散炉戸の旧欠の清算と炉座の取りつぶしを命令した。この厳命はただちに実行され、最初の予定より多数の34名の炉戸が召募され、囲内の旧炉8座と併せて計42炉が焼煉を開始した。旧拡散炉戸の炉座取りつぶしも実行されたと思われる。かくて、乾隆11年、緑紫崗廠において計画され、その後もしきりに実行しようとして果さなかった炉戸囲いこみ政策が、衰退の一途をたどっていた緑紫崗と対比的に急速に増産の実をあげ始めた大有壠において、21年後の乾隆32年、右の如き暴力的な形で果敢に実行されたのである。

だが、上の強硬策はその実行の当初から大きい矛盾を露呈せざるを得なかった。応募した34名の炉戸の中、6名が、夫長らと砂価の問題で争い、早くも翌33年、一斉に告退し、引きつづいて8名が亦、官憲や夫長の要求に応じ得ず、革退させられた。一年間に応募炉戸の3割強が苛刻な支配に耐え切れなかったのである。残留の28炉戸も「該廠炭觔難購」という理由で（勿論、燃料の炭が購入し難いというこの理由は官憲側の述べている理由で、その背後にはもっと深い事情があったと推定されるが）、「退縮不前」

という事態にたち到った。他方、採掘業の方は、その後も順調に発展し、精煉の方が追いつかず、砒石が未煉のまま堆積される一方であったため、政めて他の三処に官囲を築き、新炉戸30名を召募して、大有壠の砒石を用い、銅確保への官憲の努力がつづけられた。乾隆34～5年の交のことである。

その後、右の問題はどう展開したか、今の所、明らかにし得ない。しかし、以上詳述した所から、吾々は重要な二、三の問題をくみとることが出来る。以下、それについて論及し、ついで本稿の結びを見出したい。

〔註〕

- ①② 「成案」卷11「銅砂煎煉銅觔建設官国委州同督率工本不敷於司庫預給一切弊竇嚴行查究」
- ③ 「成案」卷13「綠紫坳各炉房添築土墻中留柵門朝啓夜閉以防偷漏銅觔之虞」
- ④ 同上
- ⑤ 以下本節の大有壠拡散炉戸の生産状況とその囲いこみ問題については「成案」卷14「飭查桂廠白鉛黒鉛及綠紫坳石壁下等处一切偷漏各条」、卷17「砒廠銅觔稀少別覓壠口開挖將旺盛情形隨時具報」、卷18「炉戸存貯砂石押令燒煉」、同卷「計粘抄稟一合」、同卷「冲頭園瑤溪藕塘三处別設炉卡燒煉銅觔毋稍透漏滋弊」などを参照。本文では一々典拠を示さない。

2. 小商品生産炉戸の没落一頭人企業の拡大と集中

第1は「官利」を代表する省当局、夫長＝頭人採掘企業経営者集団とあくまで資金の前貸と重税を拒否しつつ民間市場と結合することによって独立経営の維持、発展、私利の獲得をめざす小商品生産者炉戸達とののはげしい且つ長期に亘る階級斗争である。第2は、「我等不焼、無人応召、銅從何出、官亦無如奈」という自覚と「鳴鑼宰猪、聚党罷炉」「同心合意、彼倡此和」という一糸みだれぬ拡散炉戸の斗いにも拘らず、彼らが国家権力のあらわな介入と頭人集団の圧力によって、暴力的に敗北させられ、「官利」が勝利したことである。そしてこの暴力的過程を通じて、一方の極に小商品生産者炉戸の生産手段の全き喪失、失業化が進行し、一方の極に、

頭人集団による生産の集中（採掘・冶金両部門の統合と冶金部門の拡散から官囲内への集中）と採掘企業規模の拡大が進行したことが注目されるべきである。炉座の暴力的取りつぶしによる拡散炉戸の没落、失業化は疑うべくない。以下、企業の集中・拡大をとげた頭人集団経営の内容と性格をさぐってみる必要がある。

李光華ら8名の頭人集団は、自己所有の採掘場内に8人の「内夥」炉戸を支配した（拡散炉戸の反官斗争に参加させず、砂価その他の生産諸条件を支配した）精煉経営者でもあったが、やはり主として採掘経営者であった。即ち、彼らは地方官から「俱有身家」（みんなひとかどの財産的所有者）と称され、乾隆26年以来、5年間に万余の自備資本を投じて大有壠を開発し、その間、他の壠口にも毎月300両を投資、多数の砂丁（採掘労働者）を雇傭して企業の拡大、発展をめざしていたのである。その限りで、彼らは、自己支配の炉戸だけではまかないきれぬ銅砒石を生産、これを他の炉戸に売却することによってはじめて企業の維持、発展が可能である私的経営者であった。しかし、彼らは、前章でみたようなタイプの私的採掘企業者層—即ち、官権力の収奪に抗して民間市場に銅・鉛を私売することによって発展の方向をたどろうとしていた炉戸達と結合していた、それ故に支配階級から「奸」とよばれた夫長＝頭人層とは質的に異っていたのである。何故なら「奸」頭人層とは逆に李光華らは、銅・鉛私営鉱業の発展を阻む省一戸部権力と密着しつつ、経済的には設炉資金を、政治的には暴力を国家権力に借りて、独立私営の冶金業を粉碎し、且つ、国家権力の鑄銭材料のための注文生産に応じようとした経営者であったからである。云い換えれば、名目は同じ頭人層経営者であっても、「奸良一ならざる」頭人層が同時に併存したのであり、李光華らはまさしく、支配階級にとっての「良」頭人層の典型に外ならなかったのである。

更に李光華らが国家権力の長年意図した方向で、私炉を取りつぶし、応募炉戸の囲いこみを強行したあとの企業内生産関係を検討してみると一

層、彼らの企業の非私營的非商品生産的性格が明瞭になる。大有壠その他の鋅場における彼らと砂丁との関係は残念ながら不明であるが、今、囲い込み炉戸と彼らとの生産関係及び国家権力との関係とをふりかえってみるところだ。彼らは拡散私炉をとりつぶしたあと42炉（旧内夥8，召募34）を囲いこみに集中，その中砂価問題その他の点で衝突した結果14名の炉戸が退去し，更に冶金生産の不振によって3カ所に30炉を増したので計4カ所に58炉を支配するに至ったことは既に述べた所である。内夥8炉より58炉にふえ，拡散炉戸をつぶして僅か4カ所に集中したので，明らかに彼らの支配する冶金業の規模は拡大し且つ集中した。では，内夥8炉戸は一応除いて，新たに囲いこんだ50の炉戸と李光華らとの関係はどうか。

これらの新炉は1炉50両の割合で省政府資金によって作られ，新応募炉戸がその生産の開始後，銅で省政府に返済するとりきめが李光華らと省当局との間で出来ており，その際，李光華ら頭人集団は応募炉戸の省政府資金前借に対する単なる保証人としての役割をつとめた。⁽²⁾従って冶金の基本的生産手段たる新炉の所有権は，新炉戸がその資金を省政府に返済するまでは省政府の手にあり，新炉戸達は生産手段の単なる占有者に過ぎなかった。現に，最初に応募した34炉戸の中，砂価問題をめぐって李光華らと衝突，自ら告退した6炉戸について「所欠帑項，前經鄭丞（先出の乾隆32年度桂廠委員鄭士拔）具詳移州比追，為未解繳」と云われ，又ついで「實在貧疲，無力供練，不能清帑」という理由で李光華らからやめさせられた8炉戸についても「押追帑欠，亦未繳還」⁽³⁾と云われている。即ち，彼らが，省政府から前借りした炉の新設費はあくまでも彼らが省政府に返済する義務を負わされており，その返済が不可能の間は，彼らは決して炉の私有者ではなかったのである。従って，応募新炉戸と省政府権力との関係は，恰も官田における国家権力とその佃戸との関係に均しかつたのである。而も，省政府の前貸と注文生産を拒否した拡散炉戸がとりつぶされたあとで官囲に囲いこまれた彼らは，完全に国内市場との結合が断たれている注文

生産者であり、私的冶金業者、独立の商品生産者としての発展の方向は、彼らが、頭人集団の支配下にある限り、閉されていたと断定しなければならないのである。更に、彼らは炉の建設資金を省政府に現物の銅で返済しなければならなかったのであるから、きびしい義務を課せられた債務佃戸的性格をも荷っていたのであり、現物銅の返済は、官田を借地していた佃戸と均しく、国家への現物地代納入に均しかつたと云えよう。而も、最初、炉戸たることを辞退した6名の炉戸は砂価が不当に高いことに抗議して退去したのであるから、残留炉戸達は、李光華ら頭人集団の定める砂価をそのままに容認せざるを得なかったに違いない。その上、李光華達が省政府の手厚い保護を要請した条件の一つに、これまで砵石100斤につき銅3斤10両の割で省政府に納めていた銅を4斤に増して納入することを約束しているので(本稿39頁)、一層深められた省政府の収取分も、残留炉戸の負担に転嫁されたに違いない。かくて、頭人集団対囲いこみ炉戸達の関係は、緑紫崗のそれと違って、正常な砵石売買関係ではない。炉戸達は国家権力を代弁し、官田全体を強固に支配する頭人集団に対して、全く非商品生産的に隷属していたのであり、炉費を返済して炉の所有者に、或いは頭人権力と砵石を対等に売買し得る独立生産者に上昇する途は、44家の拡散炉戸のように徹底的に闘う以外にないと断定するのが合法則的であろう。独立の商品生産者が暴力的に叩きつぶされたその権力関係のただ中に閉じこめられていたのであるから。

かくて、李光華ら頭人経営者達は、生産を集中し、経営規模を拡大しつつ、マニユ資本家的な発展をとげたような外観をとっている。しかし、その内容と性格は恰も官有田地の債務佃戸に対する管理人の如きものであり、強いて云えば非商品生産的官営マニユ経営者の如きものであったと判断すべきではなかろうか。たとえ彼らが採掘部門で新らしい賃銀労働者を雇傭・収奪する私的企業家であったとしても。これが、血で血を洗うような斗争の末、拡散炉戸が分解・没落した過程から産み出された頭人型企业

の性格、内容に外ならなかったのである。

〔註〕

①②③ 本章第1節〔註〕⑤の諸史料参照。

五. む す び

それでは、乾隆30年代において、湖南省銅・鋅業は明代初期の官営鋅業に逆転したのであろうか。悪循環と停滞とが明・清鋅業の発展法則だったのか？ この問いに対して、はっきりノーと答えたい。何故か？

第1に、名は同じく頭人経営者集団であっても、当時、相対立する二つのタイプのそれが併存していたのである。この事は本稿の本論で力説した所だが、重大なので再言しよう。当時の廠務関係官僚が「夫長奸良不一」と慨歎したように、一つの夫長タイプは奸であり、他の一つのタイプは良であった。官憲にとっての「良き」頭人は確かに李光華達の如き方向へ進んだ。しかし「奸」なる頭人達はそうではなかった。前章で詳細に考察したように、湖南省当局は中央（戸部）と密接な連絡をとりつつ、炉戸の囲いこみ、銅鋅業の基本的生産主体の官営化＝反動再編成を、乾隆10年以来策しつつけて来た。その強力、執拗な策謀をほぼ20年間に亘って拒みつけ、実行させなかったのは、この「よこしまな」頭人集団を重要構成員とする企業家各層であった。私は最近の論文（「東洋史研究」17の1）で、頭人集団が、特権商人とともに、清朝支配階級の代理人たる性格と、反官的私的企業性格との相矛盾する二つの性格を内包していたことを構造論的に考察した。だが、炉戸囲いこみに端的に示された国家権力の私営銅鋅業再編成に抵抗し、冶金部門における基本的生産主体たる炉戸の発展方向に歩調を併せた緑紫崗頭人集団の如きは、その国家権力代理人的性格を私営企業家的性格によって統一したものに外ならない。その限り、それらの頭人集団は、清代銅、鉛鋅業の発展を荷っていた。そしてその発展方向こそ、清朝支配階級の至上命令（制錢＝兵餉の確保）に致命的危機をもたら

したのである。そして、この危機をもたらしたもののこそ（私の推定では私的マニュ企業を頂点とする）私営企業の発展なのであった。それ故にこそ、国家権力は「良き」頭人集団を保護育成しつつ、冶金業における最も弱い一環たる小商品生産者層＝拡散炉戸層を暴力的に叩きつぶし、私的企業の対抗物としての官営マニュ企業を上から作り出さねばならなかったのである。この没落拡散炉戸に反して、たとえば、緑紫崗の炉戸達は、脱税と市場結合の斗争を通じて囲いこみを拒みつつけたのであるが、それ故に亦、拡散炉戸を暴力的につぶす過程で作り出された李光華的企業は、清朝支配階級の銅鋳業支配のまさしく危機的産物であり、その動揺衰退の申し子であった。

そのことと関連して、吾々は第2の問題に直面する。即ち、李光華的頭人企業は、その成立の当初から、発展ではなく、逆に衰退せざるを得ない必然性を内包していたことである。確かに、彼らの採掘部門企業は乾隆30年代初期においては、可成りめざましい発展をとげていた。しかし、その企業の完成部門ともいべき冶金部門においては、その成立の当初から怖るべき矛盾に当面していたのである。端的に云えば、拡散独立炉戸達が、李光華達の要求通りに砒石を買い、精煉を行いつづければ、縮少再生産の途に追いこまれざるを得なかったその同じ客観的生産諸条件、否、それ以上に劣悪な諸条件の中で、どうして、囲いこみ炉戸達が、冶金生産を発展させて行けるであろうか。既に見た通り（本稿40頁）、最初に応募した34名の炉戸の中、3割強の14名が、一年そこそこの間に、苛酷な囲いこみ条件に耐え切れず、生産から離脱し、残留の28炉戸も「退縮不前」、即ち、縮少再生産の過程をたどらざるを得なかったのである。2度目に応募した30名の炉戸の生産状況については知り得る史料を持たないが、最初の炉戸を縮少再生産に追いこんだ根本的諸条件（＝官囲内への強制囲いこみに象徴される重税、民間市場遮断、新炉の所有権及び砒石の購買権さえない非商品生産者的諸条件）に変化が無い限り、再度の応募炉戸数の増加と場所的

な集中は最初の応募炉戸の量的増加にとどまり、その間に質的な発展が存在する余地がないのである。むしろ、独立自営の冶銅業を前向きに発展させようと血みどろに斗争した拡散炉戸を暴力的に叩きつぶしたその国家権力の手厚い保護を頭人企業家が受ければ受けるだけ、その支配下の応募所[炉戸の生産は、拡大再生産の方向はおろか、縮少再生産の途を歩まざるを得ないのである。と云うことは、李光華的タイプの頭人企業の生産の拡大と集中は、現象的には独立自営の小商品生産を叩きつぶし、それに勝利したかのように、従って亦、湖南銅鋅業が、かつての官営鋅業に逆行したかのように見えはするが、事實は、李光華的頭人企業が示すように、その暴力的成立の当初から敗北・崩壊の途をつき進んでいたことを物語っているのである。採掘部門で生産規模を拡大し、生産増大の実を挙げながら、冶金部門で縮少再生産の方向をたどったということは、単に、彼らの企業内の二部門が一時的にアンバランスな構造を採っていたということでは決してないし、採掘部門での利潤によって、冶金部門での欠損（縮少再生産）を補い、打開し得るという程のものではない。逆に李光華らが応募炉戸を佃戸的に収奪すればする程、その冶金生産は縮少せざるを得ない必然性を荷っていたのである。中国のすぐれた経済史家嚴中平氏は複雑多岐な雲南銅鋅業の生産関係を分析し、それは官廠ではないが、同時に廠民が生産物を自由に販売し得なかった。従って、官廠でもなければ民廠でもない、極めて奇妙な性格を帯びていたと結論した⁽¹⁾。吾々が本稿で詳細に考察した所では、雲南・湖南の銅・鉛企業を通じて、確かにその官廠化を産み出す客観的危機は不断に存在した。しかし、同時に、国家権力にとって好ましくない私的商品生産が、かかる客観的諸条件と斗いながら発展していたのであり、「官利」に隷属する企業が「私利」企業の最も弱い一環に勝利したかに見えたその瞬間に自らの敗北＝縮少再生産の途をまっしぐらにつき進まざるを得ない諸前提を作り出していたのである。重ねて云えば、李光華・的企業の拡大、集中、拡散炉戸の没落は、単純に官廠への逆行であったと

は云い切れないのである。国家権力の側から云えば、李光華らへの手厚い援助、支持を通じて官廠化に成功したかのように見えながら、自己の要求（＝制錢と兵餉の確保）を実現する基盤を自ら掘りくずす墓掘り人に転化して行ったのである。「光緒桂陽直隸州志」の卷二十貨殖篇は、吾々にとって極めて重要な問題を提示してくれる。—「清代の初期中期には桂陽州の鉍業資本家（及びその他の富者）は、しばしば清朝に対して巨額の金銭を寄附してくれたが、太平天国勃発に際しては桂陽州の出資は8万両にも達しない」。そしてこの編者はこう嘆息する。「民力竭矣。……使当砵・塩盛時、数十万嗟嗟可辦！」と。あれだけ手厚い保護を与えてやった李光華的企業家も、太平天国による危機に際しては、も早や清朝に御恩返しをする力を持たなかったのである。国家権力によって上から暴力的に再編成された官営マニユ的企業は、やはりそれ自体崩壊せざるを得ず、それ故亦、政府にとって好ましくなかった「商」—頭人—一般砂戸人—炉戸—砂丁、冶金労働者、そして「客販」達の反官私利追究の過程にこそ清代銅鉛鉍業発展の契機が見出されるのであり、亦、その斗いこそ清朝の鉍業支配の基盤を掘り崩す力だったのである。

而も第3に、真の発展を荷ったその力そのものも支配階級とその権力に対して完全な勝利を歌い得なかったことも事実である。現に、省政府の強制的な資金前貸を拒否し、頭人企業家と対等の立場で砵石を購買し、完成製品を自由に販売することによって発展の途をたどろうと血みどろに斗争した拡散炉戸達も、ついに強力な国家権力によって没落せざるを得なかったのである。特権商人や客販や頭人層の力を利用しつつ、官囲への囲いこみを実現させなかった緑紫崗の炉戸の生産も（詳細な事情、真相は今伺い得ないが）必ずしも順調な発展をたどらず、彼らの生産の衰退が亦、国家権力と李光華的企業家の大有壠炉戸への集中攻撃を許す一つの前提条件ともなったのである。かくて、清代の銅鉛鉍業は、制錢・兵餉の確保をめざす国家権力のきびしい直接的な支配に直面せざるを得ない、いわば特殊な

産業部門でありながら（私の推定によれば）、マニユ企業を頂点とする私営企業を基軸として発展し、単純小商品企業でさえ、血で血を洗う反官斗争を敢行して、経営の維持と発展を計り、不断に国家権力を脅かしながら、而も、結局敗北と没落のコースをたどらざるを得なかったのである。他方、国家権力の強力且つ直接的な保護の下に独立自営の小企業を叩きつぶすことを通じて生産の増大、集中を計った官営的企業も亦、その成立の当初から衰退のコースをたどらざるを得なかったものと思われる。

（1961年1月18日脱稿）

〔附記〕

清代鋳業に関するこれまでの拙稿と同様、本稿も亦、東洋文庫、東京大学東洋文化研究所、天理図書館、京都大学文学部、京都大学人文科学研究所の方々の厚意によって成ったものである。特に、本稿の主要史料、「湖南省例成案」閲覧の便を賜わった東京大学東洋文化研究所の方々、とりわけ仁井田陞、西嶋定生両氏に深謝したい。なお、本稿は文部省昭和26年27年度個人研究費及び昭和32年度総合研究費一雍正時代史研究一による研究成果の一部であり、この一部は昭和35年度社会経済史学会大会で報告したものである。